中等國語讀本

新修二版

卷九

4a
810
昭5

42543
教科書文庫
4
810
44-1930
20000
90669

資料室

40
810
BB5

文部省檢定濟

昭和五年十月九日 中學校國語科用

昭和八年七月五日 實業學校國語科用

中等國語讀本

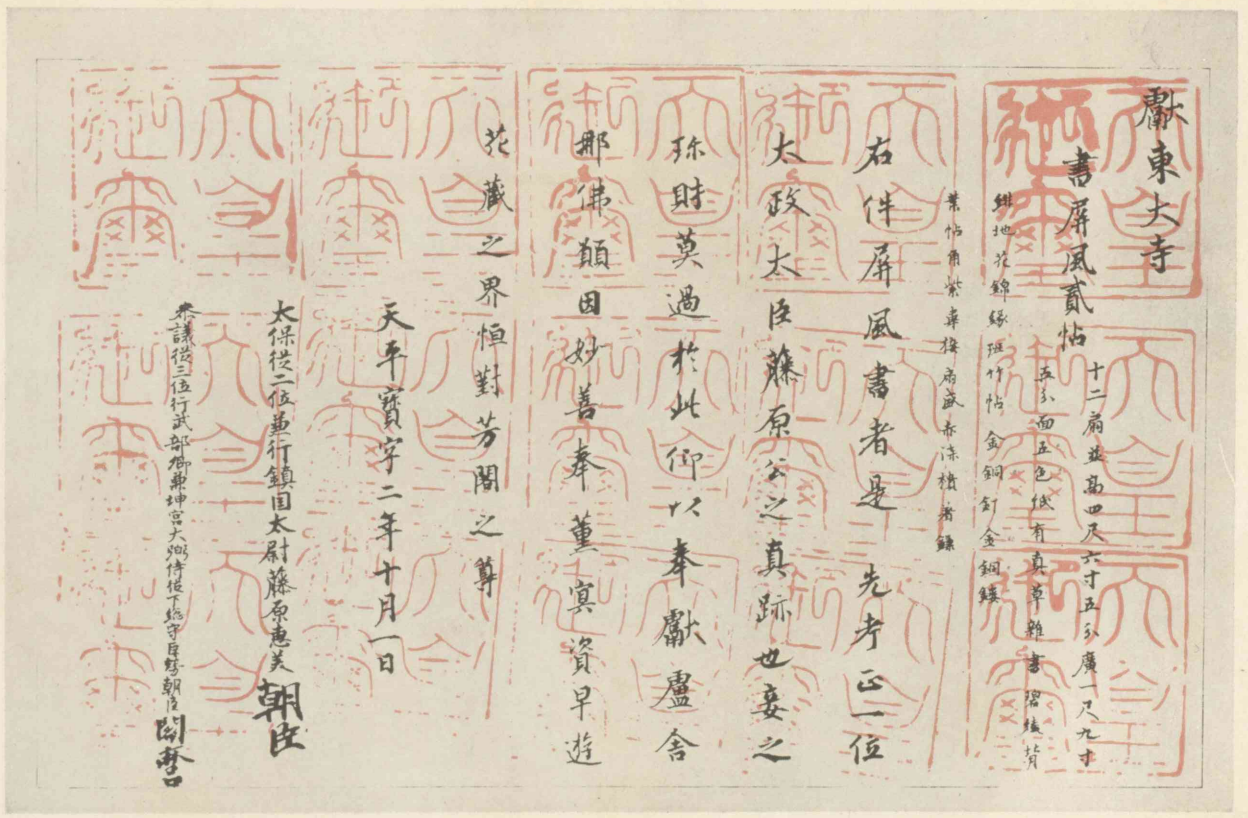
新修二版

標準國文問題新選 塚本哲三著 六〇

新訂國文解釋法 塚本哲三著 一八〇

広島大学 図書 90669

編者
落合直文
金子元臣



獻東大寺
書屏風貳帖
十二扇並高四尺六寸五分廣一尺九寸
五分面五色紙有真草雜書褙紙貲
緋地花錦緣碧作帖金銅釘金銅鎖
業帖南紫韋袋所藏赤漆櫃者鎖
右件屏風書者是先考正一位
太政太臣藤原公之真跡也妾之
珍財莫過於此仰以奉獻盧舍
那佛願因好善奉薦冥資早遊
花藏之界恒對芳閣之尊
天平寶字二年十月一日
太保從二位兼行鎮国太尉藤原恵美朝臣
参議從三位行武部卿兼坤宮大弼侍從上総守臣藤朝臣[illegible]

卷九目次

一　昭和維新の意義……平沼騏一郎……一
二　菅公……高山樗牛……九
三　奈良の春……笹川臨風……一九
四　わが西行……金子元臣……二八
○五　大原御幸……（平家物語）……三五
○六　いざよふ月……（十六夜日記）……四三
○七　幣のおひ風……（土佐日記）……四七
一、口網……四七
二、三笠山の月……四八

三、京　入……五〇
○八　狂文三篇……五四
一、鍾馗の贊……六樹園飯盛……五四
二、鼠を責むる詞……四方赤良……五五
三、浮　世……風來山人……五六
○九　鏡の影……（大　鏡）……五七
一、つくり勘當……五七
二、鶯宿梅……五八
三、けづり屑……五九
四、三船の遊……六三
△一〇　孔子とその徒……安藤圓秀……六五

△一一　漢字及び漢文……戸川秋骨……七二
○一二　出　廬（新體詩）……土井晚翠……八〇
△一三　フランスの藝術……吉江孤雁……八四
△一四　海南小記の序……柳田國男……九〇
一五　有王島くだり……（平家物語）……九八
一六　成功の意義と安心立命……綱島梁川……一〇八
一七　月の都……（竹取物語）……一一三
一八　擬古文三篇……一一五
一、石濱の雨……加藤千蔭……一一五
二、雪中眺望……橘守部……一一八
三、祭のことば……村田春海……一二〇

一九　元　朝（俳句）……一二四
二〇　巢林子の藝術……藤　村　作…一二六
二一　最明寺殿道行……近松門左衞門…一三五
二二　大地は震動する……得　能　文…一四〇（終）
（附錄）住宅圖
國文學史（近世）
近世文學一覽

中等國語讀本　新修二版　卷九

詩經　支那古代の詩三百餘篇を輯錄したもの。

一　昭和維新の意義

維新とは、詩經の大雅に出てゐる文字であるが、これを明治中興に使用した理由は、建國の舊きに拘らずその命は維れ新にして潑剌たる生氣あり、德澤は祖宗百代に光り、功業は子孫萬世に垂れ給ふといふ意味から、天皇の丕績を讚美し奉つたによるものである。そして、この明治維新はその根本精神を神武天皇の創業に則つたのであるからつまり王政復古となるのである。

百度維新と王政復古とでは一見矛盾した觀念のやうにも考へられるが、實は楯の兩面に過ぎないのであつて、維新にしてかつ王

撥亂反正　春秋公羊傳に「撥亂世反諸正。」

大化の改新　孝德天皇の大化元年氏族政治を廢して新政を布かれしをいふ。

中大兄皇子　舒明天皇の皇子。後の天智天皇。（一二八六年—一三三一年）

政復古なのである。その何れも、正しきに反ること、即ち撥亂反正の義に於いて相一致するのである。一言にしていへば、古の道に復ることによつて、國家の面目を一新するのである。國家の政治も、長い年月には、種種の事情によつて、汚隆消長を免れないものであるから、その汚點を洗ひ、陋習を破つて、坦坦たる王道の古に立ち返り、面目を一新すること、それが維新であり、また復古なのである。

我が國の歴史について考へて見るに、維新若しくは復古として の著しい實例が前後に二度あつた。それは何人も知る如くに、大化の改新と明治の維新とである。

大化の改新は、蘇我氏、物部氏などの豪族が、自家の勢力を恃んで互に軋轢し、特に蘇我氏の如きは代代横暴を極め、國政を紊つて、果は朝廷をも蔑にするといふ事態を釀し出したので、中大兄皇子が蘇我氏を仆して、その横暴を制し、以て眞の天朝の政道を恢復遊ばしたのである。又、明治維新とてもその通りであつて、七百有餘年の間、武門がひとり政權を專にするなど、我が國體としては如何にも有るまじき狀態にあつたので、これを、見事に打破遊ばされて、天皇御親政の正道に引き戻されたのである。維新にして且復古たる所以はここに存するのである。

平沼騏一郎

昭和維新も、亦この意味のものでなければならない。尤も今日にあつては、我我國民の等しく仰ぎ奉る如くに、天皇御親政の大御代であつて、明治天皇、大正天皇、今上天皇と、代代英邁なる天皇の御仁政の下に、益國運の發展を來たしてゐる。この點は我我國民の齊しく慶賀に堪へぬ次第で、かの氏族政治とか、武門政治とかいふやうなものは、今日は見たくも見られないが、前にもいふ如く、國家の政治は、一旦は改革し

ても、長い間には、又あそこが弛緩し、ここが破損するといふ風に、種種の弊害が生まれて來るものであつて、本來は明皎皎たるべき政道の面にも、曇が出來たり、汚點が著いたりすることを免れないのである。

歷史的事實について觀察するに大化の改新の如きも、本筋は何處までも、復古、反正の大綱にかはりはないが、その補助作用としての、細目的な政治の運用といふことになると、時勢の推移に從ひ、環境の如何によつて、種種の變革を加へ、また創設をも怠つてはならぬことを知り、時弊を矯める爲に、庶政に對して斷乎たる改革を施したが新制を採用することに就いては、時の先進國に範を求めることが最も便利であり、且最も至當であつたので、その範を先進國たる支那に取つた。卽ち唐制に則つて新政を布かれたのである。その際、これが取捨選擇には十分の注意を拂つたことであらうが、その實行はなかなか口でいふやうに容易なものではなく、聊か唐樣になり過ぎた形となつて、我が國固有の美點が閑却され勝であつたといふ非難を免れなかつた。これが爲に折角の改新も、その光澤を幾分減殺するに至つたかの觀が無いでもなかつた。この唐制を餘に多く輸入したといふことから、その後種種の弊害も出て來たので、遂に天武天皇の朝に至つて、それ等の非難に鑑みられて、再び舊制に復せられたことが多かつたのである。

明治の維新にも、やはり同樣のことが行はれ、その弊害も亦同樣に現はれて來てゐる。明治の維新によつて、王政は名實共に復古し、ここに國家の立て直しは出來たが、遺憾ながら長い間の鎖國政策のために、所謂文明開化に立ち後れた形となつて、當時の先進國たる歐米諸國に較べると、見劣のする點が多く、隨つて彼に學ぶべきものが隨分多かつた。そこで、畏くも明治天皇は、宇內の大勢と我が

大化ノ改新ト明治維新ノ弊害

國の前途とを深く軫念あらせられて、開國進取の國是を御定めになり、恰も天智天皇の朝に唐制を摸倣せられた如く、範を西洋諸國に御求めになつて、各般の制度文物を御制定遊ばされた。これは當時の事情としては誠に已むを得ないことであつた、と申すよりもむしろ至當のことであつたのである。勿論當時とても、建國の精神は確立せられて居つて、その精神は何處までも我が國固有のものには相違なかつたが、只現はれた形の上から見ると、いかにも西洋趣味が勝ち過ぎて居るやうな觀もあつた。それといふのも、開國進取の御趣旨が、一般の人人の頭ではよく理解しかねたところから、何でも西洋に學ぶがよいといふ風に解釋して、明けても暮れても西洋西洋と、西洋かぶれをして了つたので、その弊害が、爾後、社會の各方面に浸潤して、以て今日に及んだのである。

今日の我が國は、明治、大正の昭代を經て、昭和の大御代となり、國

運の隆盛は前古未曾有であり、しかも一躍世界列强の班に列して、世界の問題に向つても、有力なる發言權を有するに至つたが、ここまで成長して來た我が國は、最早、明治初年の日本ではなく、何處から見ても、押しも押されもせぬ世界の一等國であるから、從來のやうに、徒に西洋の物眞似をして喜んでゐる場合ではない。飽くまでも、固有の精神を基礎として、これを擴充し發揮して、逆に西洋諸國に對して、政治の模範を示して行くべきである。

然るに、西洋摸倣の流弊が今や社會の各方面に亙つて、幾多の惡影響を及ぼしてゐることは掩ふべからざる事實である。殊に最近西洋流の唯物觀に基く一種の社會思想が侵入して來て、將來我が國の運命を擔つて立つべき青年學生の間に、相當危險な感化を及ぼしつつある事實に鑑みても、誠に怖るべく戒むべき傾向といはなければならない。尤もかくいへばとて、外國のものは何でも排斥

せよといふやうな頑迷固陋の見を支持してはならぬことは、論を俟たない。只徒なる西洋摸倣から生ずる種種の弊害は、今にして根本的にこれを除去しなければならないのである。言ふまでもなく西洋には又、我我の學ぶべき幾多の長所があるのであるから、彼の長を採つて我が短を補ひ、以て國家の生命の培養に資せしめねばならぬことは、今も昔も變りはない。明治天皇の開國進取の聖謨も亦この御精神に基くのであつて、今なほ依然として我が國民にその針路を示し給ふのである。

要するに、我が建國の精神をますます發揚し、我が國體を永遠に維持して行くといふ大目的の下に於いて、適宜に、且冷靜に、西洋の思想、學術、並に制度文物等を輸入して、よくこれを咀嚼し、陶冶して、以て自國の榮養とするといふ心掛が、今後と雖も最も必要なことである。（平沼騏一郎――雑誌國本）

平沼騏一郎　法學博士。樞密院副議長。男爵。鳥取縣の人。慶應三年九月生まる。

二　菅公

延喜元年二月一日、公京都を發して太宰府に赴く。從ふ者は小男と小女と、味酒安行と名づくる一門生とのみ。その子の官にあるもの、處を異にして盡く流竄せられ、その他門下、郎等一人も公に伴へるものなし。夫人、女子亦隨ひ行くを許されず。ただ敕使藤原眞興等衞士若干人を率ゐて護送せるのみ。嗚呼昨は臺閣の寵臣、今は邊陲の遷客、何等の轉變、何等の悲慘ぞや。住み慣れし紅梅殿を出づる時、平生愛せる庭前の梅花を見て悽惻の情に勝へず、一首を詠じていはく、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春なわすれそ。

京を離れて後數日、夫人に送れる歌あり。

太宰府　福岡縣筑紫郡水城村にその址あり。

君がすむ宿のこずゑをゆくゆくも
　かくるるまでに反り見しはや。

敕使藤原眞興は攝津において公に別れ、右衞門少尉善友、益友、衞士二人を率ゐ、代つて筑紫に赴く。當時の太政官の官符を見れば、公は殆ど純然たる囚人にして、任中俸を賜はることもなかりしなり。

公の前途や實に慘憺たりと謂ふべし。かの白樂天が北窓三友を想うて、二十八韻の詩を作りたるは蓋しこの時なり。中に自ら境遇を述べていはく、

自從敕使驅將去、　父子一時五處離、
口不能言眼中血、　俯仰天神與地祇、
東行西行雲渺渺、　二月三月日遲遲、
重關警固知聞斷、　單寢辛酸夢見稀、
山河邈矣隨行隔、　風景黯然在路移、

白樂天　唐の詩人。名は居易、樂天はその字。諸官を經て刑部尚書に至る。（西曆七七三年―八四七年）

三友　琴、詩、酒。

二十八韻の詩　本文はその後半なり。

平到謫所誰與食、　生及秋風定無衣、
古之三友一生樂、　今之三友一生悲、
古不同今今異古、　一悲一樂志所之。

字字人の腸を斷つ。行き行きて河内の國土師の里に至り、道明寺に次る。道明寺は菅家歷代の菩提寺にして、當時菅公の姨覺壽尼あり。蓬萍一たび別れなば、いづれの時を期してか相會するを得ん。公惜別の情を歌うていはく、

鳴けばこそわかれをいそげ鷄の音の
　きこえぬ里のあかつきもがな。

播磨の國明石の驛に宿れる一夜、驛長公を見てその轉變の甚しきに驚く。公乃ち一聯を作りて自ら慰めていはく、

驛長莫驚時變改、　一榮一落是春秋。

山河邈たり行くに隨つて隔たり、風景黯然として路に在つて移る。

土師の里　大阪府南河内郡道明寺村の舊稱。

道明寺　一に土師寺といふ。今は眞言宗の尼院なり。

明石の驛　今の兵庫縣明石市大字大藏谷にありき。

長亭短亭幾たびか公を送迎し、日を積み月を重ねて、公は遂に太宰府の配處に到る。

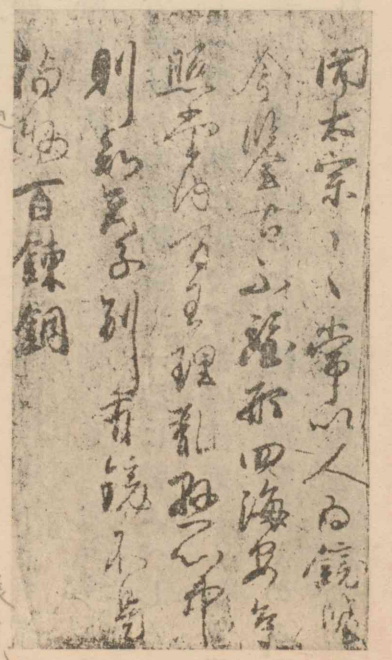
太宰府の配處は公に取りて絶好の詩境なりき。外に名利の競爭（ある）なく、内に危殆の憂悶なし。公や靜に往時を懷慕し、現境を思料し、詠歎によりてその衷情を遣るべきなり。天は公に授くるに詩人の天分を以てし、而して、まづ公に與ふるに政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや、煩惱内に公を苦しめ、讒奸外に公を陷れ、遂に公を（して）無告の流人たらしめき。然れども、悲しいかな、かくの如くなるにあらずんば、公は遂に詩人たる能はざりしならん。しかも公は死に至るまでこの天分の地に居るを悲しみ、靜に春秋の榮落を觀じて、何時か昔日の榮華

菅公

（我有ニ一言）
聞ニ太宗一太宗
常以人爲レ
鏡、鑒レ今鑒レ
古不レ鑒レ形、
四海安危照ニ
掌内一百王理
亂懸ニ心中一乃
知天子別有レ
鏡、不ニ是揚
州百錬銅。

に歸るあらんことを望みたりき。この憂愁と希望との現はるるところに、公の天分は遂に大成せられたり。而して、公みづからは毫もこれを知らざりしなり。嗚呼天道の冷酷無情、一に何ぞここに至るや。

太宰府における公の詩は甚だ多からず。然れども一言一句と雖も性靈の聲ならざるはなし。文字時に洗錬ならず、藻思必しも巧緻ならずと雖も、眞情常に紙面に汪溢して、公の面目躍如たるをおぼゆ。これを南海の詩に較ぶれば、意更に摯實、情更に痛切、感極まるところ往往人をして卒讀に堪へざらしむ。詩もここに到りては徒に技巧のみにあらざるなり。蕘ずる前集めて一卷とな



菅公筆

紀長谷雄　從三位中納言。文章を以て重んぜらる。延喜十二年二月薨ず。（一五〇五年―一五七二年）

都府樓　福岡縣筑紫郡水城村に、その址あり。

觀音寺　觀世音寺。同村にあり。四海道敕建の戒壇にて九州第一の貴寺たりき。

し、封緘して紀長谷雄に送る。長谷雄これを見、天を仰いで歎息せりといふ。今のいはゆる菅家後集と稱するものこれなり。今左にその五六を摘錄せん。

自詠

離家三四月、落淚百千行、
萬事皆如夢、時時仰彼蒼。

これ後集卷頭の詩なり。公が昨今の轉變眞に一夢に較ぶべし。その筑紫に在るや、門を杜ぢて一歩も外に出でず。都府樓近しと雖も纔に瓦の色を望み、觀音寺遠からずと雖もただ鐘の聲を聞くのみ。警吏の門を守るにあらざれども、公みづから檢束して遙に謹愼の意を致すしなり。その詩にいはく。

一從謫落在柴荆、萬死兢兢跼蹐情、
都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、
中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎、
此地雖身無檢繫、何爲寸步出門行。

秋氣やうやく催して、旅雁わたること頻なり。憐むべし、公はなほ何時かは京都に還る日あるべきを思量して、一縷の望を繫ぎしなり。たまたま旅雁を見て遙に情を託す。何ぞそれ悽愴たる。

我爲遷客汝來賓、共是蕭蕭旅漂身、
敧枕思量歸去日、我知何歲汝明春。

重陽の佳節　九月九日の節供。

重陽の佳節は來れり。しかも公は唯ひとり敗屋の下に愁臥するのみ。遙に去年の今夜清涼に侍せしを憶へば、感慨何ぞ勝へんや。有名なる九月十日の絶唱は、實にこの感慨を敍べたるなり。

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、
恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香。

十日去つて十五日來たる。月光鏡に似たれども罪を明かにする無

く、風氣刀の如けれども愁を破るに由なし。顏容日に衰へて、千里誰にか訴へん。卽ち唱うていはく、

黃萎顏色白霜頭、況復千餘里外投。
昔被榮華簪組縛、今爲貶謫草萊囚。
月光似鏡無明罪、風氣如刀不破愁。
隨見隨聞皆慘慄、此秋獨作我身秋。

罪無くしてこの流竄に遇へりと雖も、公は一度も君王の不明を恨み、奸臣の讒構を怒りしことあらず。偏に一身の不遇を歎じて天命の否塞を悲しみたるのみなりき。唯その身の罪無くして汚名を千歲に遺すは、公の忍ぶ能はざるところなり。故に公の詩、輙もすればこの事に及ぶ。されどかくの如き境遇にありて、なほ君恩を感謝す。以て公の性格の甚だ高くして且美なるを見るべきなり。

漢詩の外、公に和歌の詠あり。又以て當時の境遇を想ふべし。その

四五を左に錄す。

恩賜の御衣（北野緣起）

雨のふる日

詞書　ある夕べをちかたに煙のたつを見て

夕されば野にも山にも立つけぶり
なげきよりこそ燃えまさりけれ。

雲の浮き漂ふを見て

山わかれ飛びゆく雲のかへり來る
かげ見る時ぞなほ憑まるる。

あめの下かわける程のなければや
著てしぬれ衣干るよしもなき。

野をよめる

つくしにも紫おふる野邊はあれど
なき名かなしむ人ぞきこえぬ。

延喜三年二月二十五日、公はかくの如き慘憺たる事情の下に病歿せり。時に年五十九。京師を出でしより二箇年餘。その墓所を安樂寺といふ。越えて二年、公の隨臣味酒安行始めて神殿を安樂寺に立て、天滿大自在天神と稱せり。

かくの如く、太宰府の左遷は、啻に公をしてその詩人の天分を全うせしめたるのみならず、その人物の上にも一層の品位を加へしめたるなり。（高山樗牛――菅公傳）

安樂寺　福岡縣筑紫郡太宰府村にあり。太宰府天滿宮のある地。

高山樗牛　文學博士。名は林次郎、仙臺の人。雜誌太陽に文藝評論の筆を揮ひて文名ありき。明治三十五年十二月歿す。（一二五三一年―二五六二年）

三輪　奈良縣磯城郡三輪町。

傍畝、耳無、香具山　大和平野の中央に屹立し、大和三山と稱せらる。畝傍山は高市郡。耳無、香具の二山は磯城郡。

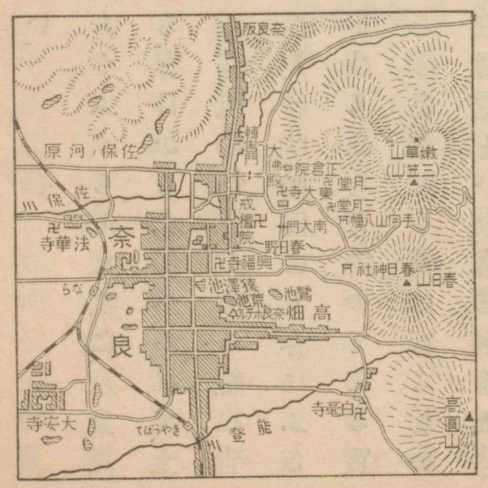
春日野の云云　古今集、よみ人知らず「春日野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜つみてむ」。

咲く花の云云　萬葉集、小野老「青丹よし奈良

三　奈良の春

四季の風景中、奈良が格段すぐれて居るのは春である。

奈良の旅籠屋、三輪の茶屋には、東風が暖簾をそよそよと吹いて居る。河内の山山には霞がたなびいて、麥秀づること五六寸、菜の花は限なく金色の浪を打ち、その間を紫雲英の紅が交織に彩る。雲雀の聲は遠近にほがらかに響き、遙に畝傍、耳無、香具山がおぼろに見える。春の大和路はまことに長閑である。大宮人は春日野の飛火の野守に若菜の摘み頃を尋ねた。げに「咲く花の匂ふが如く」と謳はれた奈良の都は、春日



の都は咲く花の匂ふが如く今盛なり」。

猿澤の池　奈良市登大路、興福寺南崖下にあり。

二月堂　東大寺に屬する一堂にして當山最古の建物なり。

三月堂　東大寺に屬する一堂。若草山麓の高處にあり。その舞臺に立てば、大和平野、生駒の峯峯一眸の中に收まる。

熙熙たる情景に溢れてゐたに相違ない。

猿澤の池水が溢んで、衣掛柳の芽が青くふくらんだ頃に、奈良見物の旅人はぞろぞろと奈良驛で下りる。春日から大佛へかけて、土産物を賣る店店の呼聲にも、おのづから春風の情味がある。紅に青に金色に、美しく輝かしく彩られた奈良人形は、如何にも春にふさはしい。蕨餅、火打餅の皿の上にも落花がひらひらと舞つて來る。實に奈良は春の世界だ。春日の巫女とはその名を聞くだに春らしい情緒を唆るではないか。二月堂といひ三月堂といひ、春の名を既に負うてゐるではないか。若草山は春を象徴し、佐保山、佐保川は春の心を表現してゐる。同じく武藏野といふも、關東のそれは秋月を連想させるが、若草山の裾にある武藏野は若菜摘の情景を偲ばせる。二月堂の高欄に凭つて遙に故都を俯瞰する時、言葉以上に寧樂の春の畫は長閑で、大杉の樹の間に咲き亂れた花は風なきに散り、絲

藥師寺　奈良縣生駒郡都跡村。法相宗の大本山。天平年中の造營。

法隆寺　同郡法隆寺村。法相宗の大本山。推古天皇の朝の創建。

名工　運慶と滋慶とを指す。東方の密迹金剛は運慶の作、西方の那羅延金剛は滋慶の作。

遊はちらちらと古き礎石の邊に立ち舞ふ。一つ二つ撞きだす鐘の音は大氣に溶け入り、やがて消えやらぬ餘韻を遠く雲間に漂はしめる。

奈良（中村雅彦筆）

春雨の絲よりも細く降りこぼれる日に、更に故都を訪ねて見よ。藥師寺の古塔は煙りて夢の如く、法隆寺は靄の中にぼかされて幻のやうに見える。その古の繁華の名殘たる一木一石も悉く雨に濡れて、春愁の情は無言の裏に深い。大佛殿は寂寞として八角鑄透の金銅燈籠は物寂しく佇んでゐる。名工が鍛へに鍛へた腕で彫刻した南大門の仁王像は、たとへ浮世に如何なる變亂

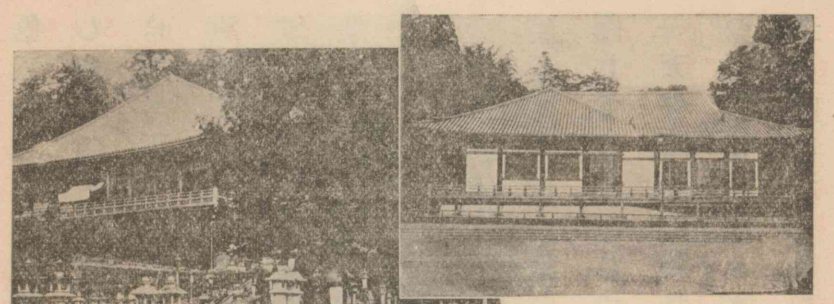
奈良春の色

があらうとも、一切人界を超越して、永劫に藝術の春を誇りげである。薄暗い殿堂の奥深く法の燈が微かに瞬いてゐる處に、崇高尊嚴な、慈悲圓滿な御佛を仰ぐ時、外には春雨が音もなく注いで、四邊に森嚴の氣が漲る。その佛像は千年の古、非凡な藝術家が信仰の強い、燃ゆるが如き力を傾けて、自信の緊張を示した名作である。かかる名作に對して見れば、藝術が既に信仰であり、鑑賞も亦信仰である。

奈良の文化は春の文化であつた。奈良の古藝術も亦春の藝術であつた。さうして藝術の奈良であつた。推古朝より鎌倉時代に至るまで、幾多の名人、巨匠が心血を瀝いだ製作の、幸に今日に傳はつた物も多く、我等はそれ等に依つて當代の文化を追想し得ることを祝福せねばならぬ。それ等の藝術品は單に我が邦だけにとどまらず、實に世界的の藝術品である。

將來せられた唐代の文化が加はつて、七堂伽藍となり、崇高なる

五濁惡世
劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の五濁ある世。



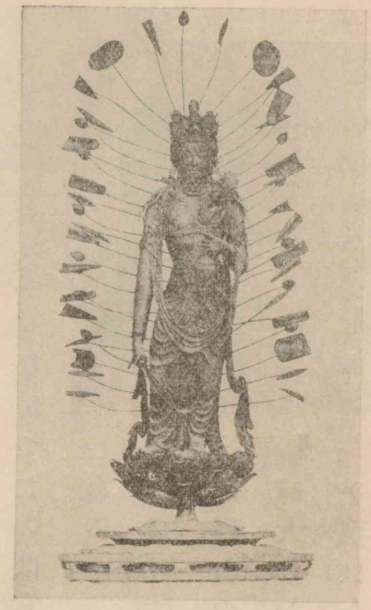
三月堂

二月堂

佛像となつて、茲に日本文化の光は赫灼として輝いたのであつた。その影響、その感化は固より唐代の文化に多謝すべきであるが、藝術の日本が、藝術の唐に對して少しも遜る所のなかつたのは、當然とはいへ、又欣快の極みである。

流石に五丈三尺餘の大佛を建立する程あつて、奈良の藝術は極めて規模雄偉、瑰麗なものであつた。一切五濁惡世の無量無數無邊の衆生をして、皆金面には信仰、敬虔の熱烈さを表はして

色三十二相を得て寶蓮華に坐し、無量の樂を享け、天の妙華を降らしめることは、その當然の歸趣であつた。されば巨匠が冱えたる腕に打ち下す鑿の一刻み一刻みには、溢るる力があり、燒くが如き熱があり、心血俱に瀝下して、藝術の香は繽紛として高かつたのである。名利を忘れ、我慾を離れ、一向にその藝術に打ち瀝がれた名匠の魂は、その作品の裏に磅礴して、燦爛として輝いてゐる。



法華寺本尊

天平時代に於ける奈良は佛地であり、淨土であり、極樂世界であつた。然し遷都と共に行く春の名殘をとどめて、盡きやらぬ春愁は到る處に遺されてゐる。ただ藝術の春のみは久遠不滅の壽を保つ

玄昉
興福寺の僧。靈龜二年入唐、歸朝の後僧正に任ぜらる。天平十八年六月寂す。（一一四〇六年）

廣嗣
藤原宇合の子。太宰少貳となる。上表して玄昉及び吉備眞備

て、世界的古文化の香は今も猶高い。

白法隱沒して鬪諍修羅の世が多いのに、その間にあつて、この世からなる極樂淨土を現じ、懺悔滅罪して平和の春を出現させようとなされた聖德太子、聖武天皇の御理想は高遠で、その御德は洪大無量である。人類の理想はそこにある。その理想を現實化して、平和の世界、理想の天地を目前に現はしたのが天平時代であつた。然しながら人間から罪障を永久に脫離するは容易でない。既に天平の世でさへ、玄昉の我執、廣嗣の妄念などがあつて、いがみあつてゐたではないか。平和の中心で、理想の權化で、信仰の對象であつた盧舍那佛の巨像でさへ、度度の劫火に燒かれたではないか。梵唄、鐘聲に全都を搖がした七大寺の大伽藍も多く荒廢したではないか。藝術の春を誇る諸佛の靈像さへも蜘蛛の網に閉され、或は手足離散の憂目に逢はれたではないか。平和の春は久しくなかつた。人界に描

を除かんとして納れられず、天平十二年叛して誅せらる。（一一四〇〇年）

七大寺　東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺。

き出された極樂淨土は、遂に永遠のものではなかつた。

けれども、よしその理想の實現は刹那の壯觀であつたとはいへ、人間歸趨の目的點はここに在る。世界を擧げて齊しく平和の春を樂しむべき時が到來せねばならぬ。人類は我執の偏見に囚れる現狀から更に進み出でねばならぬ。奈良に遊んで、天平時代の平和を回顧する時、旺然として理想の現實化を思はざるを得ない。

かく考へ到ると、古美術の都奈良は、決して過去の遺物ではない。徒に古文化の奈良を讃歎するだけでは物足らぬ。古名匠の腕の冴えを歎美するだけでは能事と謂はれぬ。奈良に於ける理想の現實化を、廣く、深く、强く、永遠に復活させねばならぬ。過去の華やかさにのみ憧憬するの愚を已めよ。過去と共に、我等の眼前には現在があり、未來が横たはる。我等が古文化の迹を尋ね、古藝術の香に醉はうとするのは、玩物喪志の爲でないのは勿論である。

笹川臨風　文學博士。名は種郎。東京の人。明治三年八月生まる。東京京北中學校長。

悠久なる平和の春よ、早く人間界に歸り來たれ。古美術の都奈良の春は、我等にかくあれかしと敎へてゐるではないか。

（笹川臨風――自然と文化との諧調に據る）

亭子の帝の御供に、太政大臣大堰に仕うまつり給へるに、紅葉小倉山に色色面白かりけるを、限なくめで給ひて、「行幸もあらむにいと興ある所になむありける。必ず奏してせさせ奉らむ」など申し給ひて、

小倉山みねのもみぢ葉心あらば
今一たびのみゆき待たなむ。

となむありける。かくて歸り給ひて奏し給ひければ、いと興あることなりとて大堰の行幸といふ事はじめ給ひけり。（大和物語）

醍醐の帝の御時躬恒を召して月のいと面白き夜、御遊などありて、「月を弓張といふは何の心ぞ。そのよし仕うまつれ」と仰せ給ひければ、御階のもとに候ひて仕うまつりける。

照る月を弓張としもいふことは
山邊をさしていればなりけり。

祿に大袿かづきて、又、

白雲のこのかたにしもおりゐるは
天つ風こそ吹きて來つらし。（同）

西行上人
歌僧。圓位と號す。俗名佐藤義清。鳥羽上皇に仕へ北面の武士となり左兵衛尉となる。後出家して四方に周遊す。建久元年二月京都に寂す。（一七七八年―一八五〇年）

四　わが西行

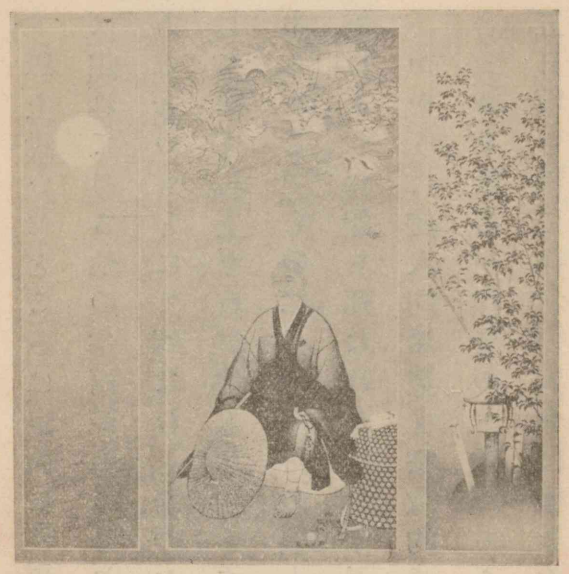
ねがはくは花のもとにて春死なむ
そのきさらぎの望月のころ。

作者一期の最大限度の欲望を敍べたものである。流石は西行上人で、俗塵の氣が微塵も無い。花の蔭で死にたいとは、何たる風流な希望であらう。しかも作者に取つては單なる風流ではない。花を愛する熱情から思ひ入つた眞劍の詞である。風流を風流として風流がるのとは違つて、心の底から迸り出た眞面目な風流である。似而非茶人や俳人などの、乙に捻るのと一緒にされては堪らない。

下句と上句との應接によつて生ずる詞、卽ち補足して聞くべき詞がこの歌には多い。語を換へていへば、はぶいた詞が多い。實に大膽なはぶき方である。辭句の末に拘泥しない奔放自在な口調は、實

に花鳥風月の歌職人の膽を寒からしめる概がある。

さて古人は、下句をただ二月の十五日頃とのみ解してゐるが、それではあまり聞方が單純である。その意は春三月の眞中の二月、二月の眞中の十五日頃、卽ち春の眞只中の頃を望んだのである。といふのは、初春は冬の名殘がうるさくて春まだ十分ならず、又暮春は花は根に鳥は舊巢に歸つて、春老いたりの歎があるからである。卽ち二月の十五日頃は花の眞盛であるからである。「望月の頃」は十五日頃の意を轉義したので、まことの滿月を花の上に希望



西行法師（佐佐木倚文筆）

あたらよの云云　後撰集、源信明「あたらよの月と花とを同じくば心知れらむ人に見せばや」。

したのではない。古歌に「あたらよの月と花とを」など詠んでもあるが、作者の眞意は花にあつて月にはない。

以上說いたところは、表面に現はれたこの歌の一面であるが、實は隱れてゐる他の半面がある。それは宗教上から起つた信仰心である。「花のもとにて死なむ」と希つたのは、元來行雲流水東西に漂泊して、樹下石上をわが衾とし枕とする行脚の本色を發揮したのである。そこで「その二月の望月の頃」も、現界の大導師釋迦牟尼佛の涅槃に入つた、卽ち死なれた二月十五日を斥したものとなる。

かやうに詩人的希望と宗教的希望とが合致したのも珍しい。否合致させたのが作者の手腕であらう。果してこの合致した二月十五日頃を以て作者の天命は盡きた。卽ち建久元年二月十六日、花の盛に作者西行は入寂に及んだ。自然の感應實に恐るべき威嚴をもつた歌である。

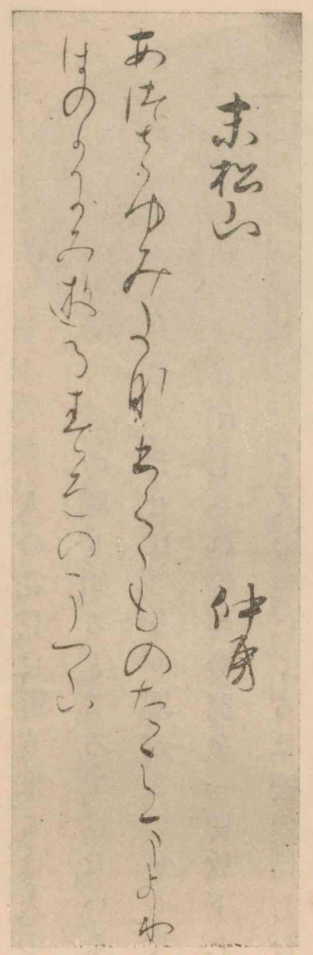
俊成卿　歌人。藤原俊忠の子。入道して釋阿と號す。千載集の撰者。皇太后宮大夫正三位に至る。世に五條三位と稱す。元久元年十一月薨ず。（一七七四年―一八六四年）

末松山　仲房
あづさゆみ　たなびくくもの　たえまよりほ　のかにみゆる　すゑのまつ山

定家　歌人。藤原俊成の子。新古今集、新勅撰集の撰者。正二位權中納言に至る。世

俊成卿の評に、

「願はくは」と置きて「春死なむ」といへる、うるはしき姿にあらず。この體に取りて、上下相かなひいみじく聞ゆるなり。さりとて深き道に入らざらむ輩は、かく詠まむとせばかなはざる事ありぬべし。これは又到れる時の事なり。



西行筆

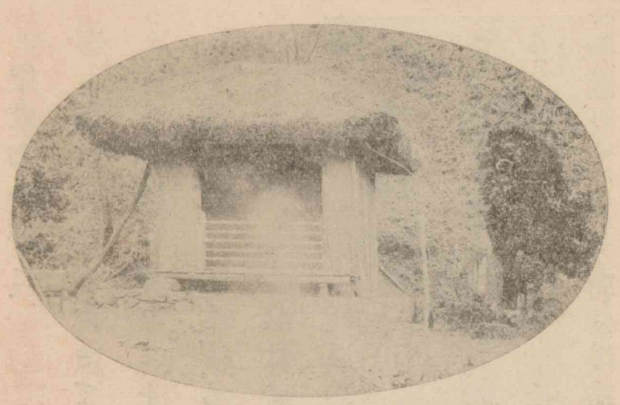
とある、俊成の家法はひたすら溫雅を主としてゐる。疎宕にして奇氣あるものは比較的喜ばれない。そこでこの家法を墨守した定家以來の歌が、すべて消極的に萎縮して來た。人の師たる者は大いに

に京極黄門と稱す。仁治二年八月薨ず。（一八二二年―一九〇一年）

鑑みなければならぬ事である。

花見にとむれつつ人のくるのみぞ
あたら櫻のとがにはありける。

人の花見に群り來るは人の勝手で、櫻の關り知るところではない。その元をただせば、つまり櫻がよいからである。しかしそれ等の分別を一切放下して、騷がしく人の見にくるは櫻の惜しむべき疵だと罵つた。これ固より無理やりな言ひがかりである、濡衣である。この位明白に不條理な論告はなからう。誰が見ても直にその無理がわかる。されば櫻といふものは實によい花で、眞の缺點といふものが



西行庵

無いといふことを反證することになる。かういふ結果を、多くの思索を要せずに讀者の脳裏に印象させようといふのが、作者の最初からの希望であり、魂膽であり山である。奇矯の言語もたまには面白いが、やたら眞似られては大變である。山葵はつんとしてよい氣持だといつたところで、飯の代りにはならぬ。

ながむとて花にもいたく馴れぬれば
散るわかれこそかなしかりけれ。

馴るれば馴れて非情の花の散る別れにも悲しくなるとは、何といふ優しい心根であらう。もとより深く花を愛する情から起つて來たのではあるが、愛は微細な物にまで及ぶ作者の暖かい心持を讃歎せずには居られない。

「散るわかれ」の一語、實にこの歌に對して畫龍點睛の妙がある。散るを見るこそ悲しかりけれ」などいつても差支はない。平凡の作者

金子元臣　國文學者。東京の人。明治元年十二月生まる。御歌所寄人、國學院大學教授。

ならぬ寧ろさういふ風に詠み去るであらう。然るに花の散りゆくを、人の袂を別つて東西し去るに譬喩して、「散る別れ」といつたその修辭の簡潔さ、金石一打、しかも鏘然として響の永い趣がある。さてその意趣から見れば、三句の「馴れぬれば」を回顧して、人生における愛別離苦の悲哀を映帶して歌つて居る。それが爲に吟誦一過、いよいよ痛切に散る別れの悲哀を感ずるのである。（金子元臣）

「弓取りし人の元の心の猛きには、詠む歌も直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒荒しき心には詠みうつすまじきものに、宮人達は沙汰し給へりとや。軍にいで立ちて、笛、鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、この三十餘りの學びには心の後るるは如何に。」こは賢き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代代の帝は、馬に鞍おき弓矢み執らして軍に立たせ給ひし、その御歌を讀み見奉れば、猛く直直しく、調もいと高しとこそうち聞き侍れ。いでや、歌よまむとては、益荒男の心を取り隱し、あてになよびかにのみ詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君が敏く猛き御心のままにうちまねばせ給はむには、今の世の人、誰かは立ちあへ奉らむ。」（上田秋成）

法皇　後白河法皇。

建禮門院　平德子。高倉天皇の中宮、安德天皇の御生母。平清盛の女。（一八一七年―一八七三年）

北祭　賀茂祭をいふ。石清水八幡の南祭に對す。

清原深養父　歌人。醍醐帝の朝に仕ふ。

補陀落寺　京都府愛宕郡靜原の山麓にあり。

小野の皇太皇后　後冷泉天皇の皇后藤原歡子。その舊迹は同郡高野附近なりといふ。

五　大原御幸

法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の御すまひ御覽ぜまほしく思し召されけれども、二月、三月の程は嵐烈しく、餘寒もいまだ盡きず、峯の白雪絶えやらで、谷のつららも打ち解けず。かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。忍の御幸なりけれども、供奉の人人には公卿六人、殿上人八人、北面少少候ひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太皇后の舊迹叡覽ありて、それより御輿にぞ召されける。遠山にかかれる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるる。卯月二十日餘りのことなれば、夏草の茂みが末をわけ入らせ給ふ。

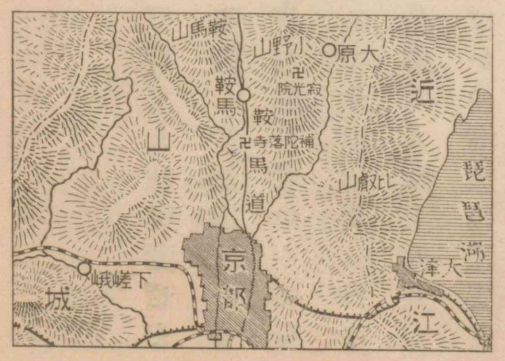
西の山の麓に一宇の御堂あり、卽ち寂光院これなり。舊う造りな

せる泉水、木立よしあるさまの處なり。「甕破れては霧不斷の香を燒き、樞落ちては月常住の燭を挑ぐ」とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつつ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかかれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山時鳥の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを叡覽ありて、かうぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻散りしきて
波の花こそさかりなりけれ。

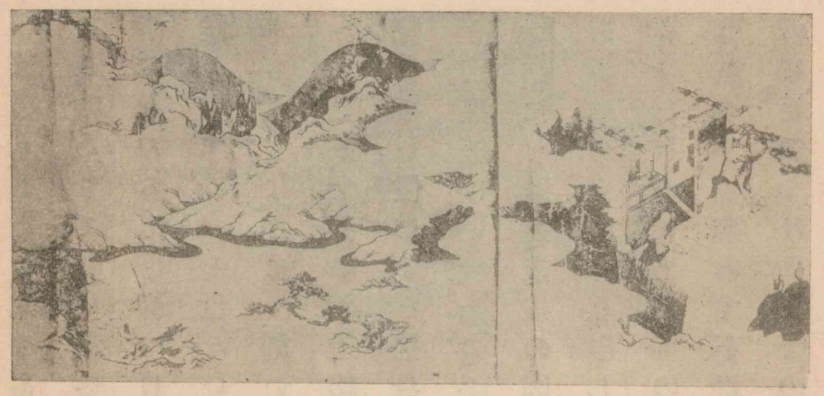
ふりにける岩の絶間より落ちくる水の音さへ、古びよしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。

青葉まじり云云
金葉集、藤原盛房「夏山の青葉まじりの遲櫻初花よりも珍しきかな」。



瓢簞屢空し云云
橘直幹が申文中の語。

原憲
字は子思。孔子の門人。孔子の卒後、草澤の中に隱る。（一四曆前五一六年）



大原御幸（平家物語繪卷）

さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦、朝顏這ひかかり、しのぶまじりの忘草「瓢簞屢空し、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す」ともいひつべし。板の葺目もまばらにて、時雨も、霜も、おく露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野べ、いささ小笹に風さわぎ、世に堪へぬ身の習として、憂き節しげき竹柱、都の方の音づれは、間遠に結へるませ垣や、わづかに言問ふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、正木のかづら、青つづら、くる人稀なる處なり。

五戒
偷盜戒、邪淫戒、妄語戒、殺生戒、飲酒戒。

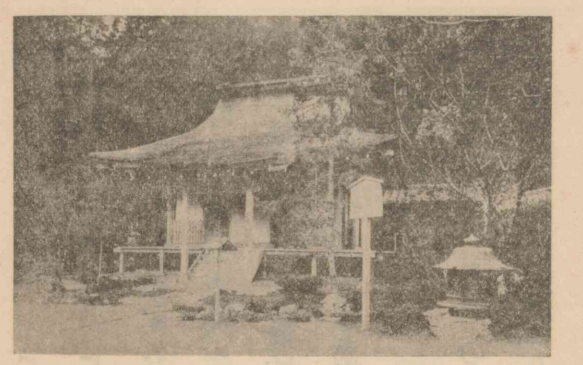
十善
不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不貪欲、不瞋恚、不邪見。

因果經
四卷。劉宋の求那跋陀羅の譯。因果應報の例を擧げて教訓したるもの。

法皇「人やある、人やある」と召されけれども、御いらへ申すものもなし。稍ありて老い衰へたる尼一人まゐりたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ」と仰せければ、「この上の山へ花つみに入らせ給ひて候と申す。」「さこそ世をいとふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉る人もなきにや。御いたはしうこそ」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒、十善の御果報盡きさせ給ふによりて、今かかる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候べき。因果經には、『欲知過去因、見其現在果。欲知未來果、見其現在因』と說かれたり。過去、未來の因果をかねて悟らせ給ひなば、つやつや御歎あるべからず」とぞ申しける。この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。あの有樣にてもかやうの事申す不思議さよと思し召して、「抑も汝は如何なるものぞ」と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、しばしは御返事にも

信西
藤原通憲。實兼の子。鳥羽天皇以下四朝に歷仕す。平治の亂に信賴、義朝に殺さる。（一一八一九年）紀伊二位名は朝子。

及ばず。稍ありて涙を抑へて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位、覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ」とて、袖を顏に押しあてて忍びあへぬ樣、目も當てられず。法皇「げにも汝は阿波内侍にてあるござんなれ」とて、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、只夢とのみ思し召して、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿、殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたさてかなたこなたを叡覽あるに、庭の千草露おもく籬に倒れかれば、ことわりにて申しけりとぞ各感じあはれける。


寂光院

善導和尚　唐の名僧。淨土の教義を鼓吹せし人。（西暦六一三年―六八一）

先帝　安德天皇。

八軸の妙文　法華經なり。八卷ある故にいふ。

九帖の御書　善導の觀無量壽經の疏なり。九卷ある故にいふ。

大江定基法師　齊光の子。文章を能くす。參河守に任ぜらる。後僧となり寂昭と號す。入宋して、長元九年宋に寂す。（一六二四年―一六九六年）

清涼山　支那山西省にあり。五臺山文殊寺のある處。

かりつつ、外面の小田も水越えて、鷸たつ隙も見えわかず。女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の畫像、右に善導和尚、並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いて所所におされたり。その中に、大江の定基法師が清涼山にして詠じたりけむ、「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」とも書かれたり。少しひきのけて女院の御歌とおぼしくて、

思ひきやみ山の奥にすまひして
雲井の月をよそに見むとは。

さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さしも本朝、漢土のたへなる類、數を盡し

鳥飼中納言伊實　藤原伊通の子。永暦元年薨ず。（一七八五年―一八二〇年）

五條大納言邦綱　又土御門と號す。治承三年二月薨ず。（一七七九年―一八三九年）

し綾羅錦繡の粧、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿、殿上人も、まのあたり見奉りし事ども今のやうに覺えて、袖をぞ絞られける。

稍ありて、山の上より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつつおり煩ひたる樣なりけり。法皇「あれは如何なるものぞ」と仰せければ、老尼涙をおさへて、「花筐臂にかけ、岩躑躅取り具して持たせ給ひて候は女院にてわたらせ給ひ候。爪木に蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼中納言伊實が女、五條大納言邦綱の養子、先帝の御乳母、大納言典侍局」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿、殿上人も皆袖をぞ濡らされける。女院は世を厭ふ御習といひながら、今かかる有樣を見え參らせむずらむ恥しさよ、消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵宵毎の閼伽の水、むすぶ袂も萎るるに、曉起の袖のうへ、山路の露もしげくして、絞

りやかねさせ給ひけむ、山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、呆れて立たせましたる處に、內侍の尼參りつつ花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習何か苦しう候べき。早早御見參ありて還御なし參らせ候へ」と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはしまし、「一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな」とて御見參ありけり。（平家物語）

今ぞしる御裳濯川のながれとて波の底にも都ありとは　（二位尼）

けふまではあればある世のよの中に夢の中にも夢を見るかな　（敎盛）

みゆきする末も都とおもへどもなほ慰まぬ波の上かな　（經正）

思ふこと語りあはせむ時鳥げに嬉しくも西へゆくかな　（重衡）

ふみの名
孝經のこと。
孔安國の序に、「魯恭王使二人壞二夫子講堂一、於二壁中一石函一、得二古文孝經廿二章一。」

神樂の詞
「あはれあなおもしろ、あなたのし、あなさやけ、おけ」。
世を治め云云
紀貫之の古今集の序に見ゆ。

六　いざよふ月

むかし壁の中より求め出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりなゝ。つぐきの岡の葛葉、かへすがへすも書き置けるあとたしかなれども、かひなきものは、親のいさめなり。また賢王の人を捨て給はぬ政にも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるるものは、數ならぬ身一つなりけりと思ひ知りながら、又さてしもあらで、尙このうれへこそ遣る方なく悲しけれ。

更に思ひ續くれば、大和歌の道は、ただ誠すくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日の本の國に天の岩戸開けし時、よもの神たちの神樂の詞をはじめて、世を治め、物をやはらぐる媒となりにけるとぞ、この道の聖たちは記し置かれたりける。さてもま

二たび敕を云云
藤原定家、再度敕を奉じて新古今集と、新敕撰集とを撰し、その子爲家も亦二たび敕を奉じて續後撰集と續古今集とを撰したり。

三人のをのこ
俊成―定家―
―爲家―爲氏
―爲敎
―爲顯（以下四條出）
―爲相
―爲守

細川
兵庫縣美囊郡。

子をおもふ心の闇
後撰集、藤原兼輔「人の親の心は闇にあられど

た集を撰ぶ人はためし多かれど、二たび敕を受けて代代に聞えあげたるは、たぐひ尙あり難くやありけむ。そのあとにしも携はりて、三人のをのこ兒ども、百千の歌の古反古どもを、いかなるえにかありけむ、預かりもたることあれど、「道をたすけよ。子をはぐくめ。後の世をとへ」とて、深き契をむすび置かれし細川の流も、故なく堰きとめられしかば、迹とふ法の燈火も、道をまもり家をたすけむ親子の命も、もろ共にきえを爭ふ年月を經て、あやふく心細きものから、何としてつれなく今日までは永らふらむ。惜しからぬ身一つは易く思ひ捨つれども、子を思ふ心の闇はなほ忍びがたく、道を顧みるうらみは遺らむ方なく、さても尙あづまの龜の鑑にうつさば、曇らぬ影もや現はるると、せめて思ひ餘りて、よろづの憚を忘れ、身をえうなきものになし果てて、ゆくりもなくいさよふ月に誘はれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

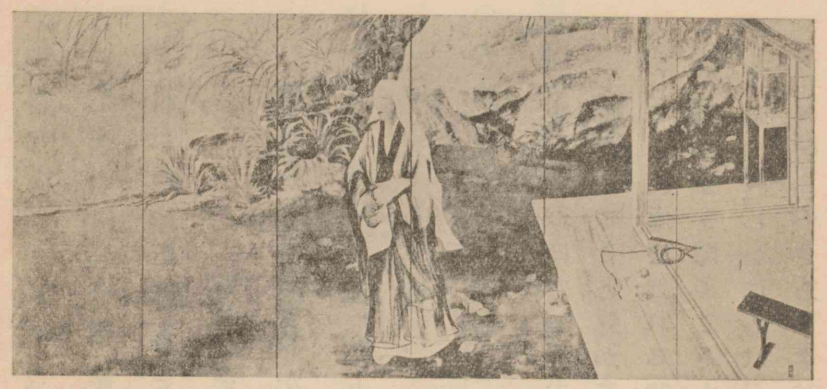
も子を思ふ道にまよひぬるかな」。

み冬たつはじめ
建治三年十月。

人やりならぬ云云
古今集、源實、「人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ」。

侍從
爲相。冷泉家の祖。正二位權中納言に至る。嘉曆三年鎌倉に薨す。（一九二三年―一九八八年）

大夫
爲守。後出家して曉月といふ。



阿佛尼　（川船水棹筆）

頃はみ冬立つはじめの定めなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつつ、事に觸れて心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いき憂しとてもとどまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。目離れせざりつる程だに、荒れ增りつる庭も籬もましてと見まはされて、慕はしげなる人人の袖の雫も慰めかねたる中にも、侍從、大夫などのあながちにうち屈したるさま、いと心苦しければ、さまざまいひこしらへぬ。

代代に書き置かれける歌の草子ども

の奥書などして、あだならぬ限を選りしたためて、侍從のかたへ送るとて書き添へたる歌、

わかの浦にかきとどめたる藻鹽草
これを昔のかたみとも見よ。

あなかしこ横波かくなはま千鳥
一かたならぬ迹をおもはば。

（十六夜日記）

天龍と名づけたるわたりあり。川深く流はげしく見ゆ。秋の水漲り來て、船の去ること速かなれば、往還の旅人たやすく向の岸に著きがたし。この河水まされる時、舟などもおのづから覆りて、底の水屑となる類多かりと聞くこそ、かの巫峽の水の流思ひ寄せられて、いと危きこちすれ。しかはあれども人の心に比ぶれば、靜なる流ぞかしと思ふにも、譬ふべき方なきは、世にふる道のけはしき習なり。（東關紀行）

鹿兒の崎
高知縣長岡郡。

七　幣のおひ風

一、口　網

廿七日。鹿兒の崎といふ所に、守のはらから、又こと人かれこれ酒など持ちて追ひきて、磯におり居て別れ難きことをいふ。守の館の人人の中に、この來る人人ぞ心あるやうにはいはれほのめく。かく別れがたくいひて、かの人人の口網も諸持にて、この海邊にて荷ひ出だせる歌、

惜しと思ふ人やとまるとなく鴨の
うち群れてこそ我は來にけれ。

といひてありければ、いとたく愛でて、行く人の詠めりける、

棹させど底ひ知られぬわたつみの
ふかきこころを君に見るかな。

浦戸
高知縣吾川郡の東。

といふ間に、機取ものの哀も知らで、おのれし酒をくらひつれば、早くいなむとて、「潮滿ちぬ、風も吹きぬべし」と騒げば、船に乘りなむとす。この折にある人人、折節につけて、唐歌ども時に似つかはしきをいふ。又ある人、西國なれど甲斐歌など歌ふ。かく歌ふに、「船屋形の塵もちり、空ゆく雲もただよひぬ」とぞいふなる。今宵浦戸にとまる。（土佐日記）

紀貫之（信實筆）

二、三笠山の月

廿日（正月）。昨日のやうなれば船いださず。皆人人うれへ歎く。苦しく心もとなければ、只日の經ぬる數を、今日いくか、廿日、三十日と數ふれば、およびも損はれぬべし。

安倍仲麿
船守の子。靈龜二年遣唐留學生となり、寶龜元年唐に客死す。（一三六一年―一四三〇年）

青海原
古今集には「天の原」とあり。

夜はいも寢ず。いとわびし。廿日の月出でにけり。山の端もなくて海の中よりぞ出でくる。かやうなるを見て、昔安倍の仲麿といひける人のもろこしに渡りて歸り來たる時に、船に乘るべき所にてかの國人うまのはなむけし、わかれ惜しみてかしこの唐歌作りなどしけり。飽かずやありけむ、廿日の夜の月出づるまでぞありける。この月は海よりぞ出でける。これを見て仲麿のぬし、「わが國にはかかる歌をなむ、神代より神も詠みたび、今はかみ、なかしもの人も、かやうに別れ惜しみよろこびもあり、悲しみもある時には詠む」とて詠めりける歌、

青海原ふりさけ見れば春日なる
　　みかさの山にいでし月かも。

とぞ詠めりける。

かの國人聞き知るまじう覺えけれども、ことの心を男文字にさ

まを書き出だして、ここの詞傳へたる人にいひ知らせければ、こころをや聞き得たりけむ、いと思の外になむ愛でける。もろこしとこの國とは詞異なるものから、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今そのかみを思ひ遣りてある人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど
海よりいでて海にこそいれ。（土佐日記）

三、京入

十六日。けふの夕つ方、京に上るついでに見れば、山崎の店なる小櫃の繪も、まがりの法螺の形も變らざりけり。賣る人の心をぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島阪にて人あるじしたり。必しもあるまじき業なり。立ちて行きし時よりも、くる時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも返りごとす。

ある人　紀貫之の自稱。

小櫃

島阪　京都府乙訓郡山崎の附近。

桂川　京都府葛野郡。大堰川の下流。飛鳥川にも云云

古今集、詠者不詳「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる」。

夜になして京に入らむと思へば、急ぎしもせぬほどに月出でぬ。桂川月あかきにぞ渡る。人人のいはく、「この川飛鳥川にもあらねば、淵瀬更にかはらざりけり」といひて、ある人の詠める歌、

久方の月に生ひたるかつら川
底なる影もかはらざりけり。

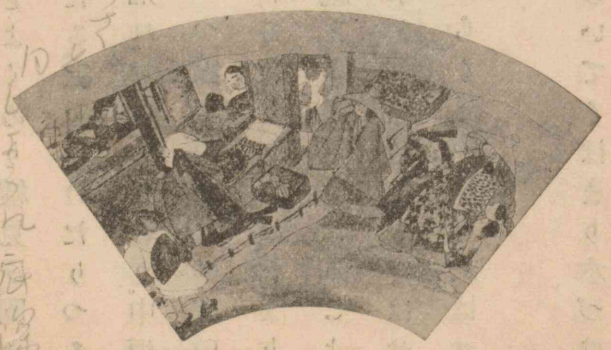
又ある人のいへる、

あま雲のはるかなりつる桂川
袖をひでても渡りぬるかな。

又ある人詠める、

かつら川わが心にも通はねど
おなじ深さに流るべらなり。

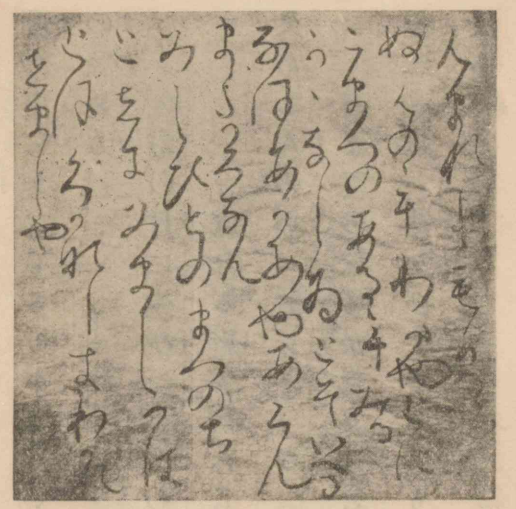
京の嬉しきあまりに歌もあまりぞ多かる。夜更けてくれば處處も



見世棚（扇面寫經）

見えず。京に入り立ちてうれし。

家に到りて門に入るに、月あかければ、いとよくあり樣見ゆ。聞きしより勝りていふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。されば、たより毎に物も絶えず得させたる。こよひかかる事と聲高に物もいはせず。いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。



土佐日記（藤原定家筆）

さて池めいてくぼまり水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年の中に千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大方みな荒れにたれば、あはれとぞ人人いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきが中に、この家にて生まれし女子のもろ共に歸らねば、いかがは悲しき。船人も皆子抱きてののしる。かかるうちに尙悲しみに堪へずして、密に心知れる人といへりける歌、

生まれしも歸らぬものをわが宿に
小松のあるを見るがかなしさ。

とぞいへる。尙飽かずやあらむ、又かくなむ。

見し人を松の千年に見ましかば
とほくかなしき別れせましや。

忘れ難く口惜しきこと多かれど、え盡さず。とまれかくまれ疾くやりてむ。（土佐日記）

鍾馗
唐の玄宗の時の下第進士の傳説化せられたるもの。

六樹園飯盛
本名石川雅望。通稱五郎兵衞。江戸の人。宿屋を業とす。國文和歌に通じ、狂文狂歌をよくす。晩年武州府中に居る。文政十三年閏三月歿す。（二四一三年—二四九〇年）

八　狂文三篇

一、鍾馗の贊

大臣と稱すれども隨身、舍人もしたがへず。降魔の靈驗ありながら鎭座せる社も見えず。顔に、手足に朱をそそぎて、拔身を執つて振りまはす。もしなま醉かと見てあれば、柏餅を引窓からのぞく。下戸か上戸かわくべからぬ文武兼備の進士の垂迹げにちはやぶるかみ幟、あふげばいよいよ軒にたかし。

鍾　馗（山田道安筆）

偃鼠河に云云
莊子遊逍遙篇に出でたる語。

夜も明けば
伊勢物語に、「夜もあけばきつにはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」。

漢の張湯云云
張湯、幼時、肉を盜みたる鼠を捕へ、その罪を劾し、これを磔せしこと、史記に見えたり。

石見銀山
鼠取藥。

西寺の老鼠
催馬樂、老鼠に、「西寺の老鼠、わか鼠、おんもつんづ、けさつんづ、云云。」

むらさきの云云
論語に、「子曰、鬼すまぬわがおほ君の國なれば

鍾馗の劍のぬきがひもなし。」（六樹園飯盛——東なまり）

二、鼠を責むる詞

偃鼠河に飲めども腹に滿つるに過ぎず。汝なんぞわが肉池を飲み乾して、わが印石をして顔色なからしむる。夜も明けば猫にはめなんか、日が暮ればおとしにかけんか。地獄おとしか、極樂おとしか。罪の輕重を升おとしにはからば、漢の張湯がためし無きにしもあらねど、もし白鼠と內緣あらば、大黑殿のおぼしめしもいかがと思ひて、石見銀山一等をゆるし、鼠衣を剝ぎ、鼠算の過料を取り、壁の穴穴、桁の隅隅、のこらず追放するものなり。このおもむきを西寺の老鼠よりわか草のはつか鼠にいたるまで、よくよく申しきかすべきものなり。

惡ニ紫之奪ヒ朱也。」

四方赤良
蜀山人、太田南畝の戯號。德川幕府の家人にして狂歌狂文を以て一世に鳴る。文政六年四月歿す。(二四二八年—二四八三年)

古人
北宋の蘇東坡。春宵一刻云云東坡の七言絶句の起句。

風來山人
平賀鳩溪の戯號。名は國倫、別に天竺浪人、森羅萬象、福内鬼外等の號あり。讃岐の人。博物學者、戯作者。安永八年十二月歿す。(二三七三年—二四三九年)

むらさきの外ににくきは肉いれの
朱をうばへるねずみいろかな
(四方赤良——四方のあか)

三、浮世

古人「春宵一刻價千金」とめつたに高ばれば、又浮世を三分五厘と捨賣にする男もあり。然れども、春宵一刻に千金出して買うたたはけもなく、三分五厘に賣りてしまふ出來合の浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて、出るままのいひたい事、つまる所はよくもあしくもいひなし次第の浮世にて、浮世の定めなきは人の心の定めなきなり。(風來山人——根南志草)

うかうかと暮らすやうでも瓢簞は
胸のあたりに締めくくりあり　(大綱)

延喜の帝
醍醐天皇。

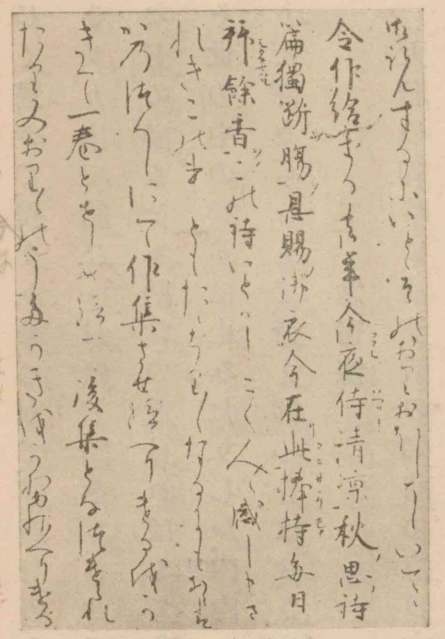
本院の大臣
左大臣藤原時平。基經の長子。延喜九年四月薨ず。(一五三一年—一五六九年)

御覽するに、いとゝそのおりおほしめしいでゝ令レ作給ける。去年今夜侍ニ清涼ニ、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在レ此、捧持毎日拜ニ餘香ニ。この詩いとかしこく、人々感じ申されき。この事ど

九　鏡の影

一、つくり勘當

延喜の帝世間の作法したためさせ給ひしかど、過差をえしづめさせ給はざりしに、本院の大臣、制を破りたる御さうぞくの、殊の外にめでたきをして、内に參り給ひて殿上に侍ひ給ふを、帝小蔀より御覽じて、御氣色いとあしくならせ給ひて、職事をめして、「世間の過差の制きびしき頃、左の大臣の、一の人といひながら美麗ごとの外にて參れる、便なきことなり。速に罷り出づべきよ



大鑑古寫本

もたどちりく〳〵なるにもあらず、かのつくしにて作集させ給へりけるをかきて、一卷とせしめ給て、後集となづけられたり。又おりく〳〵のうたかきなかせ給へりける。

天暦　村上天皇の御代の年號。

し仰せよ」と仰せられければ、職事承はりて、いかならむと恐れ覺えけれど、參りて、わななくわななくしかじかの事と申しければ、いみじく驚きて、畏まり承はりて、御隨身のみ前參るも制し給ひて急ぎまかり出で給ひ、一月ほど門をささせて簾の外にも出で給はず、人などの參るをも、勘當の重ければとて會はせ給はざりけり。さてこそ世の中の過差は止みたりしか。內內に承はりしには、かくてばかりぞ靜まらむとて、帝と御心合はせさせ給へりけるとぞ。（大鏡）

二、鶯宿梅

天暦の御時に、清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、求めさせ給ひしに、なにがしの主の藏人にておはせし時、承はりて一京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京のそこそこなる家に、色濃く咲きたる木の容體美しきが侍りしを掘り取りしかば、家あるじの「木にこれ結ひ附けてもて參れ」といはせ給ひしかば、あるやうこそはとてもて參りて候ひしを、何ぞとて御覽じければ、女の手にて書きて侍りける、

敕なればいともかしこし鶯の
宿はと問はばいかが答へむ。

とありけるに、あやしく思し召されて、「なに者の家ぞ」と尋ねさせ給ひければ、貫之ぬしの御娘の住む處なりけり。「遺恨の業をもしたりけるかな」とて悔いおはしましけり。（大鏡）

紀內侍といふ。古今六帖の著者とぞ。

三、けづり屑

花山院の御時に、五月下の闇に、五月雨も過ぎていとおどろおどろしくかき亂れ雨の降る夜、帝寂しくや思し召しけむ、殿上に出でさせおはしまして遊びおはしましけるに、人人物語り申しなどし給ひて、昔怖しかりし事どもなど申させ給へるに、「今宵こそいとむくつけき夜なれ。かく人勝なるにだに怖しく覺ゆ。まして物離れた

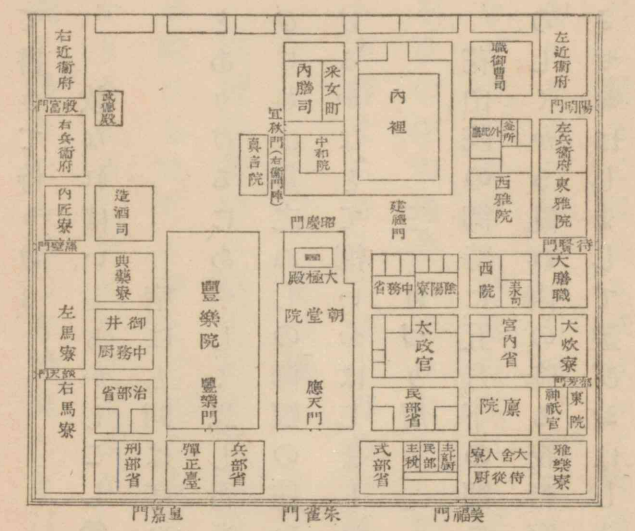
入道殿
藤原道長。兼家の第五子。一條天皇以下四朝に歷仕し、攝政關白太政大臣たり。晩年法成寺を造りて居る。世に御堂關白と稱す。萬壽四年十二月薨ず。（一六二六年―一六八七年）

道隆
兼家の第二子。內大臣、關白攝政となる。長德元年四月薨ず。

中關白と稱す。（一六〇七年―一六五五年）

道兼
兼家の第三子。長德元年五月薨ず。粟田關白又七日關白と稱す。（一六二一年―一六五五年）

る處などいかならむ。さらむ處にひとりいなむや」と仰せられけるに、人人、「えまからじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は「いづくなりともまかりなむ」と申し給ひければ、「いと興あることなり。さらばいけ。道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけ」と仰せられければ、よその君たちは便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承はり給へる殿原は御氣色かはりて、益なしとおぼしたるに、入道殿はつゆさる御氣色なくて、「私の從者をば具し候はじ。誰にても一人昭慶門まで送れ」と仰言たべ。それより內にはひとり入り侍らむ」



右衛門の陣
月華門をいふ。

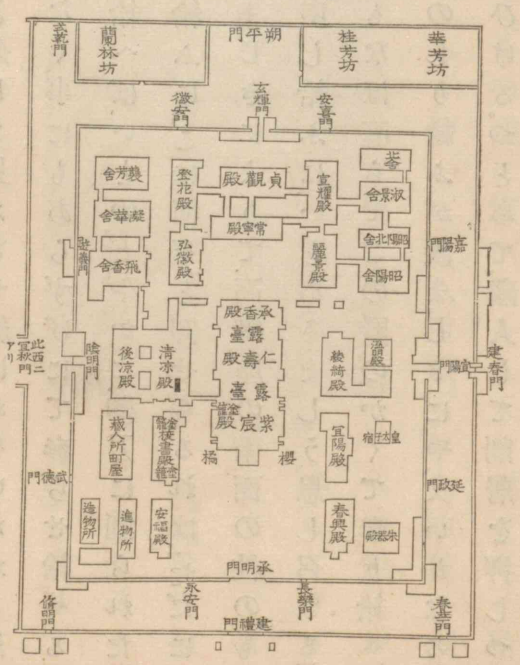
承明門
大內裏內郭門の一。

露臺
仁壽殿前にあり。

仁壽殿
中殿又東殿ともいふ。內宴、相撲、蹴鞠等を行はるる所。

と申し給へば、「證なき事にこそ」と仰せらるれば、げにとて御手箱に置かせ給へる小刀さして起ち給ひぬ。今二所もにがむにがむ各おはしましぬ。

かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけむ。「道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ」とそれさへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、ゆく手に怪しき聲どもの聞ゆるに、術なくてかへり給ふ。粟田殿は露臺のあたりまでわななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほど

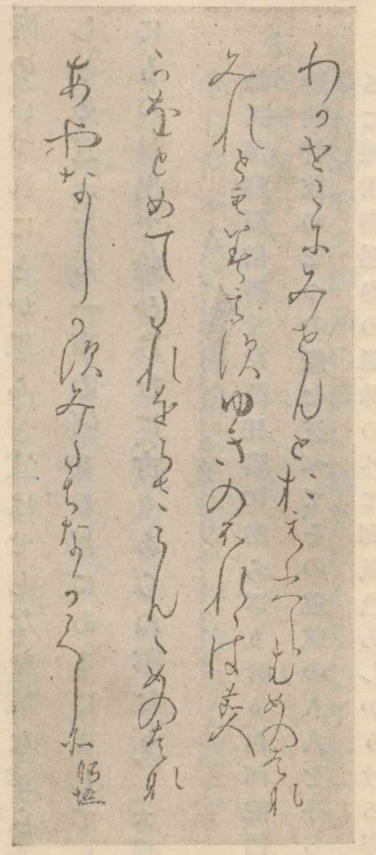


に、軒とひとしき人のあるやうに見えければ、物も覺えで、身のあらばこそ仰言をも承はらめとて、各歸り參り給へれば、御扇を叩きて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかがと思し召す程にぞ、いとさりげなく、事にもあらずげにて參らせ給へるに、「いかに、いかに」と問はせ給へば、いとのどやかに、御刀に削られたる物を取り具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ」と仰せらるれば、「ただにて歸り參り侍らむは、證候まじきによりて、高御座の南面の柱のもとを削り取りて候なり」と申し給ふに、いとあさましう思し召さる。こと殿達の御氣色は今にもなほ直らで、この殿のかくて參り給へるを、帝よりはじめ感じののしり給ふが羨ましきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ侍ひ給ひける。つとめて、藏人して削屑を押しつけさせて見給ひければ、つゆ違はざりけりとぞ。そのけづり痕は今にいとけざやかにて殘れりけり。（大鏡）

大堰　京都府葛野郡大堰川。
公任　藤原氏。關白頼忠の長子。四條大納言と稱す。長久二年正月薨ず。（一六二六年―一七〇一年）
わがせこにみせむとおもひしむめのはなみれともみえずゆきのふれゝば　赤人
かをとめてたれをらさらんゝめのはなあやなしかすみたちなかくしそ　躬恒
小倉山　京都府葛野郡嵯峨村。

四、三船の遊

ひととせ入道殿の大堰に逍遙せさせ給ひしに、作文の船、管絃の船、和歌の船と分たせ給ひて、その道に堪へたる人人を乘せさせ給ひしに、公任の大納言殿のまゐり給へるを、入道殿「かの大納言いづれの船にか乘らるべき」と宣はすれば、「和歌の船に乘り侍らむ」と宣ひて、



藤原公任筆

その船に乘りて詠み給へるぞかし。

小倉山あらしの風のさむければ
紅葉のにしききぬ人ぞなき。

申し受け給へるかひありて遊ばしたりな。御自らも宣ふなるは、「作文の船にぞ乘るべかりける。さてかばかりの詩を作りたらましかば、名の揚らむこともまさりなまし。口惜しかりける業かな。さても殿の『いづれにとか思ふ』と宣はせしなむ、我ながら心おごりせられし」とぞ宣ふなる。一事の優るるだにあるに、ましてかくいづれの道にもぬけ出で給ひけむは、古もあらぬ事なり。（大鏡）

帥民部卿經信卿、また公任卿に劣らざりけり。白河院、西川に行幸の時、詩歌管絃の三つの船を泛べて、その道道の人人を分ちて乘せられけるに、經信卿遲參の間、殊の外に御氣色あしかりける程に、とばかり待たれて參りたりけるが、三つの事を兼ねたる人にて、汀に跪きて「やや、どの船にまれ寄せ候へ」といはれたりける、時に取りていみじかりけり。かくいはむ料に遲參せられけるにこそ。さて管絃の船に乘りて、詩歌を獻ぜられたりけり。三つの船に乘るとはこれなり。（古今著聞集）

孔子　周の聖人。名は丘、字は仲尼。（西暦前五五一年―前四七九年）

子路　姓は仲、名は由、子路はその字。孔門十哲の一。（西暦前五四三年―前四八〇年）

曾晳　名は點。曾參の父。

冉有　名は求、有はその字。孔門十哲の一。（西暦前五二二年―）

公西華　名は赤、西華はその字。

一〇　孔子とその徒

孔子は愉快げに一座を見まはした。

其處には子路と曾晳と冉有と公西華との四人の者が靜に坐つてゐた。隔無い師弟の間に釀されるなごやかな空氣は室一杯に滿ちて居た。

「今日はお互に遠慮抜にして、一つ樂しく語らうではないか。」

孔子は微笑を含みながら、改めて一座を見渡した。

「其許達はね、いつも『世間から認めてくれぬ、認めてくれぬ』といふて愚痴をこぼしてゐるが、若し假に誰か其許達を認めて、任用しようといふ者があつたら、どんな事をしようと思ふかな。」

「私の抱負を申して見ませうか。」

いつも出すぎ者の子路は、孔子の言葉の終はるのを待ちかねたや

うに、臆面も無く元氣よく切り出した。

「ああ、聽きませうとも。

孔子はにこやかに子路の方へ顏を向けた。

「まあ千乘の國ですな。それも列强國の間に介まれて、兩方から絶えず壓迫を受け、その上常に戰爭に苦しみ、もう一つおまけに饑饉續といふやうな慘澹たる國ですな。さうした國の政治を私の手に委ねられましたら、三年の間には見違へるやうな立派な國に仕上げて御覽に入れます。人民は皆皆勇んで戰場に立つやうになるし、國民の道義心も高まつて、今まで壓迫してゐた周圍の國國も辟易する程な整つた國に致して見ませう。

「ほう、それはそれは。

勝ち誇つたやうな子路の姿を見遣りながら、孔子は思はず輕く笑つた。

千乘の國　大諸侯の國をいふ。方三百六十里にして、兵車千乘を出す國。

「求や、其許はどうぢやな。

「左樣でございます。まあ五六十里四方か、せめて六七十里四方の小さい國を治めさして頂きましたら、三年位遣つてゐます間には、その國の經濟情態を安定させまして、國民達が安樂に生活出來る程度位には、出來ようかと存じます。然し、禮義、音樂といふやうな國民の文化方面まで向上させるなどといふことは、私の力には及びません。その方面は然るべき人の力を借りるより致方がございません。

「成程な。では赤はどう考へるな。

「私でございますか。いや私にはとてもそんな大した力は御座いません。出來ませんことは無論承知でありますが、稽古のつもりで遣つて見たいと思ひますることは。

「ふむ。

孔子は何ものかを期待するやうに輕く合槌を打つた。

「宗廟のお祭とか、或は諸侯方の會見の際とかさういふ晴の儀式にふさはしい禮裝を致しまして、それ等の儀式のささやかな助手として、諸侯方をお輔けして見たいと存じます、無論重だつたお輔けなどは出來さうにも思へません。

公西華は遠慮勝につつましくかう答へた。

曾晳は先程から問答の邪魔にならぬ程に、輕く琴を彈きながら、他の弟子達のいふことを聞いてゐたが、問答に心を取られて、琴の手は留守になり勝であつた。

「點よ、其許の考はどうかな。

孔子は曾晳の方へ目を向けて答を促した。

曾晳はぱらりと彈きすてて琴を措くと、靜に起ち上り、恭しく一禮をして置いて、

「私の願は皆さんと少し趣が違ひますので……。

躊躇して後をいひ澁つた。

「よいではないか、何も遠慮はいらぬことぢや。唯お互に思ふことをいひ合ふだけの事ぢやものぢや。いうて御覽。

「そんなら申し上げます。さやう、暮春にはもう更衣の用意も整うて、身輕ないでたちで、五六人の若者と七八人の子供でも連れて、あの沂水の邊をぶらぶら散歩して、のんびりと溫泉にでも這入りまして、なごやかな陽を浴びながら、また晩春の野を辿りませうぞ。さうしてうつすり汗ばんだ身體に、祭壇の森の木蔭で一風入れて、聖者の德を頌へた歌でも謠ひながら、悠悠家路へ歸りたいものです。いや埒もない願でございます。

かう答へた曾晳の顏には、あの春の陽を見るやうななごやかな思が溢れてゐた。

孔子は曾皙の言葉を聽き終ると、心の底から感歎したやうに、

「結構ぢやな、結構ぢやな。俺は其許の仲間入がしたいものぢや。」

さも滿足げに孔子は更に一座を見まはした。

三人の弟子達はそれぞれ孔子の座下から退いて、後には曾皙一人が殘つてゐた。

「先生、あの三人の人達の申し上げた考はいかがでございませうな。」

曾皙は孔子の心を探るやうに訊ねた。

「なに、皆それぞれ自分の思ふことをいひ合つたまでぢや。」

「でも先生はさつき由の申したことをお哂ひになりましたが、あれはどういふ譯でございますか。」

「ははは、あれか。」

孔子は面白さうに又微笑した。

安藤圓秀
漢學者。東京帝國大學助教授。

「あれはね、一體國を治めるには禮讓といふ事が大切ぢや。治める者は謙讓で無ければならぬのぢや。ところが、肝腎な國を治めるといふ由のいひ方が、其許も聞いてゐたらうが、如何にも不遜ないひ方であつたから、それで哂つたのぢや。あれが由の癖ぢやよ。」

（安藤圓秀――孔子とその徒）

子路、曾皙、冉有、公西華侍坐。子曰、以吾一日長乎爾毋吾以也。居則曰、不吾知也。如或知爾則何以哉。子路率爾而對曰、千乘之國攝乎大國之間、加之以師旅、因之以饑饉。由也爲之、比及三年可使有勇且知方也。夫子哂之。求爾何如。對曰、方六七十如五六十。求也爲之、比及三年可使足民。如其禮樂、以俟君子。赤爾何如。對曰、非曰能之、願學焉。宗廟之事、如會同、端章甫、願爲小相焉。點爾何如。鼓瑟希、鏗爾舍瑟而作。對曰、異乎三子者之撰。子曰、何傷乎、亦各言其志也。曰、莫春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。夫子喟然歎曰、吾與點也。三子者出。曾皙後。曾皙曰、夫三子者之言何如。子曰、亦各言其志也已矣。曰、夫子何哂由也。曰、爲國以禮。其言不讓、是故哂之。（論語）

韓退之　唐の文豪。名は愈、昌黎と號す。南陽昌黎の人。嘗て佛骨表を上り憲宗の怒に觸れ、潮州刺史に貶せらる。（西曆七六八年―八二四年）

一一　漢字及び漢文

元來漢字、漢文は私の苦手である。まだ十歳にも足らぬ時に、「大學朱熹章句子程子の曰はく」で惱まされてから、やや長じて韓退之の七面倒な原人論とか、原道論とか、乃至は某某を送るの序などといふものでひどく弱らせられて以來、漢字、漢文とは絶緣して、私は横文字に入つてしまつた。そのお蔭で、今日では横文字で露命をつないで居る。明けても暮れても、出ても入つても横文字である。然しながら過去幾百千年の傳統は恐しいものである、その恩人なる横文字よりも、以前に惱まされた漢字、漢文の方がなつかしいとは、嘗て或友人と電車の中で口語詩の話をはじめ、それから進んで廣く普通の所謂詩の話に入つた時、友人は「何處の詩が良いといつて、自分には漢詩の趣が一番よく感得される」といつた。私もさう思つて居

月落ち烏啼いて云云　唐の張繼の楓橋夜泊の詩に、「月落烏啼霜滿レ天、江楓漁火對二愁眠一、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到二客船一」。

たのではあつたが、私には大體詩でも文でも漢籍は讀む力がないのであるから、生意氣にそんな說に同意する資格はないと思つたので、その時はつむじを曲げて、「それでも『月落ち烏啼いて霜天に滿つ』と讀んだのでは詩趣も音律もあつたものではない」といつた。全く反點や送假名で讀んだのでは詩の味はない筈である。然しそれにも拘らず、事實は眼に訴へるとでもいふのか、「月落烏啼霜滿天」とくると、一種の詩情のおのづから涌き起るのを禁じ得ない。音樂的方面は傳へられないが、全體としての心持は獲得される。

戸川秋骨

思ふに、私共日本人の教養は全く支那から來て居る。何事も支那に持つて行かなくては納まりが付かない。私はよくいつて居る事であるが、それは丁度西洋で何でもギリシャ、ラテンへ持つて行く

フライング、マシイン　Flying-machine
エアロプレエン　Airoplane

のと同じである。言語の事で少し面倒な話になると、西洋では必ずギリシャからラテンへ厄介をかける。例へば飛行機はフライングマシインで好ささうなものであるけれども、エアロプレエンといはなくては納まらない。どうもフライングマシインでは坐りが惡いのみならず、何處か意義に於いても盡さない處があるやうな氣がする。飛行機といふのは漢字であり漢語であるが、やさしい平易な言葉でそれを表明しては坐りの惡いのは勿論で、それよりもさういふ言葉ではどうにもいひ表はしやうがない。私共の考は大體どうしても漢字、漢語に依らなければ全くいひ表はせない。困つた事だが仕方がない。便利、不便利の問題ではない。出來る出來ないの問題である。

卽ち考がさうなつて居るのであるから、自然にそれが出來るので、從つてそれを使用するのが便利にもなる。まづ新聞に出てくる文字でもさうである。いはく護憲、いはく普選、いはく流感、いはく傳研、いはく帝展、いはく明大、慶大、早大、實に簡にして盡して居る。而してよく了解される。蓋しそれは一種の符牒であるから、簡にしてしかも多大な意義を藏して居るわけである。こんなわけで、漢字は實用から減少するどころか、いよいよその使用は增加して居ると察せられる。統計の上からでなければ確な事はいはれないが、私共の子供の時分よりも、今日の方が餘程漢字の用語は增加して居ると思ふ。少くとも私共の知らなかつた字が、日日新聞の上に殖えて來て居るやうに感ずる。便利簡速を貴ぶ新聞に、この舊弊といはれて居る漢字の增加する事は實に皮肉であるが、事實は如何ともする事が出來ない。それは今いふ通り、漢字を使ふ事が啻に便利であるばかりでなく、吾吾の考がどうしても其處へ行かなければ表明されないからである。一旦其處へ持つて行つて表明すれば、ぴつたり

考と文字とが一致するので、今度はそれを用ゐる事が便利となるのである。ここに於いてか漢字が殖えるといふ事になる。

識者は漢字を制限しようとして居るさうだが、それは無理な事である。どんな理由があるのか知らないが、それは斷じて駄目な事である。別に漢字を奬勵するにも當らないであらうが、制限するのは無效である。それは自然の流を堰き止めようとするものである。漢字には日本譯が同じでも、いろいろに異なつた細かい意味の字がある。同じくスナハチと譯しても、その字にはいろいろある。同じくカヘルの意でも、その用ゐる場合を異にする字が數多ある。むしろそれ等の使ひ分けを學んだ方が至當かも知れない。漢字を用ゐる以上、その方が論理に合つた話である。

今日では、漢文の稽古を中學の課程から減少させよといふ議論があるが、然しこれは漢字、漢文を廢止するとか排斥するとかいふ

のとは關係のないことでなくてはならない。それは丁度西洋でギリシャ、ラテンを小學校の教育からなくしたのと同じでなくてはならない。西洋でギリシャ語、ラテン語を小學教育からなくした事は、決してギリシャ語、ラテン語の教養を蔑視したのでもなければ廢止したのでもない。それは只昔のやうにギリシャ語やラテン語ですべてのものを書き、又それで話をするのを不合理としたのみで、兩語は共に今日でも西洋で重きを爲して居る。西洋ばかりではない、吾吾横文字を口にする者でも、この二つはどうしても學ばなければならないと思ふ。丁度そのやうに、日本に於いては漢字、漢文の知識がどこまでも吾吾に必要なのである。

或説からいふと、「そんなに漢字、漢文に戀戀たるのは因襲のためである。吾吾は因襲を一掃して新しくならなければならない。それでないと世界の文化に後れる。漢字、漢文のために、どれだけ吾吾は

不便を被り、時勢に後れるか知れない」といふ。この種の説をなす人は、よく巴里の平和會議の時、その日の會議の事項を、西洋人は直に印刷してこれを同胞に配布し得たのに、日本人は文字の障害のためにそれを爲し得なかつたといふ事を、漢字の不便なる適例として出すが、私は第一に、この因襲といふものの果して一掃し得られるものであるかどうかを聞きたい。第二には、それが出來た處で、そんな事をして何の得る所があるかといひたい。この場合因襲を去るといふ事は、吾吾の頭にある事を全く拂ひ去つて頭腦を白紙にするといふ事であるが、それは出來る事であらうか。どうしてそんな事が出來よう。三十歳、四十歳の人に孩兒になれといふのである。出來ない相談ではないか。又何とか魔法でも使つてそれが出來たとしてどうであらう。三十歳、四十歳の人が孩兒になつたならば、その三十年、四十年は全く浪費となり、損失となるのではないか。吾吾

戸川秋骨
名は明三。慶應大學教授。熊本縣の人。明治三年十二月生まる。

はそれでなくても時世に後れると云つて居ながら、三千年、四千年も文化を後へ返して、何も考へなかつた野蠻時代に戻ることが可能であらうか。また可能であつたとして至當な事であらうか。因襲打破は結構であるが、この場合とんだ事になる。ローマ字論者もよくこの或論者のやうな事をいふが、それはてんで問題にならない。序にいふが、私はローマ字の斷じてものにならないことを豫言して置く。何萬年の後、まるで日本語が今のそれと全く異なつたものになるやうな時があつたならば、それは知らないが。

（戸川秋骨――文鳥）

かかげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さし添へつつ見もてゆくに、遠き世の人も只さし向ひ語らふここちす。冊子つくりてをかしき節節、あるはふと思ひえたることなどをば、墨おしすりつつ書きつけなどするもをかし。（中島廣足）

土井晚翠
新體詩家。名は林吉。仙臺の人。後歐洲に留學す。第二高等學校教授。

南陽
河南省南陽府。

梁父吟
「步出齊城門、遙望蕩陰里。里中有三墳、纍纍正相似。問是誰家塚、田疆古冶氏。力能排南山、文能絕地理。一朝被讒言、二桃殺三士。誰能爲此謀、相國齊晏子」。

二二　出廬（土井晚翠）

嗚呼南陽の舊草廬、
夢はたいかに安かりし。
隴畝に民とまじはれば、
ただ一曲の梁父吟。

二十餘年のいにしへの
光を韜み香をかくし、
王佐の才に富める身も

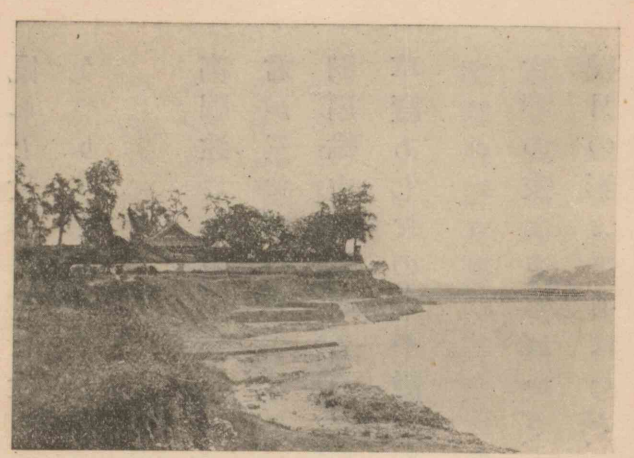
閑雲野鶴空ひろく
月を湖上に碎きては
ゆふべ暮鐘に誘はれて、

風に嘯く身はひとり、
ゆくへなみまの舟一葉、
訪ふは山寺の松の風。

江山さむるあけぼのの、
雪に驢を驅る道の上、

隆中
湖北省襄陽縣の西。

寒梅瘦せて春はやみ、
伴は野鳥の暮の歌、


諸葛孔明祠堂

その世を始め世を救ふ、

幽林蔭をたどるとき、
紫雲たなびく洞の中、
誰ぞや棊局にむかふ友。

その隆中の別天地。
空のあなたを眺むれば、
大盜きほひはびこりて
荒びて榮華さながらに、
風の枯葉を掃ふごと、
治亂興亡あとみれば、
世は一局の棊なりけり。

經綸胸にあふるれど、

名利を俗に求めねば、
亂れし世にも花は咲き、
うつりはここに二十七。

高眠遂に永からず、
君が三たびの音づれを、
羽扇綸巾風かるき、
草廬あしたの主や誰。

古琴の友よさらばいざ、
殘月の影よさらばいざ、
蒼猿ねむれ谷の橋、
草廬あしたは主もなし。

岡も臥龍の名を負ひつ。
花また散りて春秋の、

信義四海に溢れたる、
背きはてめや知己の恩。
姿は變へで立ちいづる、

あかつきさむる西窓の、
白鶴かへれ嶺の松、
岡も更へよや臥龍の名。

臥龍の名　蜀志に、「徐庶見二先主一、先主器レ之、謂二先主一曰、諸葛孔明臥龍也、將軍豈願レ見レ之乎」。

君　蜀漢の先主劉備。

成算むねに藏まりて、
ただ掌上に指すがごと
見よ九天の雲は垂れ、
蛟龍飛びぬ淵の外。（天地有情）

乾坤ここに一局棊、
三分の計はや成れば、
四海の水は皆立ちて、

臣本布衣、躬耕於南陽、苟全性命於亂世、不レ求聞達於諸侯。先帝不レ以臣卑鄙猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事。由レ是感激、遂許先帝以驅馳。後値傾覆、受任於敗軍之際、奉命於危難之間。爾來二十有一年矣。先帝知臣謹愼、故臨崩寄レ臣以大事也。受レ命以來、夙夜憂歎、恐付託不レ效、以傷先帝之明。故五月渡レ瀘、深入不毛。今南方已定、兵甲已足。當奬率三軍、北定中原。庶竭駑鈍、攘除姦凶、興復漢室、還於舊都。此臣之所以報先帝、而忠陛下之職分也。（前出師表）

一三　フランスの藝術

人間の集合生活が作り出だす歴史の相は、各時代が要求した藝術に具體的の表現を示して、その中に永遠化せられ、累積せられて果しなく續いて行く。大海の水が、その流動の勢を強く表示せんとする要求に捉へらるる時、涌き立つ波となつて立ち昂る如く、各時代の生活者がその時代の生氣を最も力強く、最も自然な姿に於いて示さんとする表現慾に捉へらるる時、藝術の波は油然として涌きあがつて來る。その表現の迹の最も顯著であつて、一見して明瞭にその時代の人生が求めた藝術の波浪の姿を掴み得るものは、特に成形の藝術であり、更に建築である。

巴里の美の一半は、この累代の生きた歴史の波浪が打ち寄せたままに凝化せられ、純化せられた集積にある。人は時代藝術の波層

ゴシック Gothic
クラシック Classic 古典的。
ロマンチック Romantic 傳奇的。

が限なくうち續く中を歩いて、科學者が地皮の斷層面より地球の歴史を讀む如く、現在までも生きて動く人間の中心要求の歴史を讀み得る。

神祕と熱意とに燃えてゐた中世紀のゴシックの會堂から、理智と統一とに綜合の姿を求めたクラシック時代の宮殿から、自然と箇人權とに熱狂した革命期ロマンチックの彫像から、民衆の力が次第に強くなるにつれて、學校や普通の住宅を中心として來た近代の建築物から、更に一方には世紀末の痛苦を示すと同時に、他方には自然の力に甦り、大地の生氣を呼吸する人間の靈の態度を示す現代人の彫刻から、我我は各時代が示す表現相の奏し出だす合唱曲を不知不識の間に感受せずにはゐられない。

巴里は藝術の都であり、生きた歴史の都であり、過去が現在の中に生き、現在が刻刻に從來の藝術の波層の上に更に新しき波層を

刻みつつ行く都である。時の歩がいかに藝術に飜譯せられ、具體化せられつつあるかを意識せずにはゐられない都である。巴里に於いては、總べての人が藝術家たらずにはゐられない。此處では時の歩と共に、環境と共に、大氣と共に、人人が自由の正眞の中心表白がなし得られる。巴里全體が巨きな彫像の群立であり、その群像のなせる綜合の音樂が大氣をゆるやかに搖り動かしてゐる。

セエヌ河　佛國ランクル平原に發し、セエヌ州内を西北流して英吉利海峽に注ぐ。Seine

セエヌの流が、更にその流の末を照らしてゐる落日が、その後の半天を染める牡丹色の後光が、マロニエの若葉が、人間の藝術と調和し、協力して全體の仕上をなしてゐる。恐らく自然もこの藝術の

ロダン作

タブロオ　Tableau　繪額。

都、表現力の盛な、然し靜穩な都會に對しては、決して他の場處で示すやうな暴力を振ふことは出來まい。時あつて岸を嚙んで溢れ出づるセエヌの洪水も、直に藝術の捕虜にせられ、タブロオの中に收められ、建築物に記念の波痕を殘して行く。

コロー筆

されば大革命の如き騷亂時代にも、他の或邦などでは到底なされ得まいと思はるることが、此處ではなされてゐる。千七百九十三年所謂恐怖の年に於いてすらあらゆる畫家、彫刻家は革命の藝術的表現時代の涌きあがり盛りあがつた姿の具體化をもとめ、又中央美術館の施

設をなし、千七百九十六年には佛蘭西全國の各都市に繪畫、彫刻、建築の學校を設けて、一般人の自由なる表現を易からしむる途を講じた。

藝術を消閑の具と考へ、高尚なる娯樂と思ひ、文藝を弱者の遊戯虛飾と思ふが如き空氣の中に育てらるる國民が、世界の何處にでも今日なほ存するならば氣の毒である。少くも一國の少數者のみがその國の藝術を專有し、大多數はそれに目を向けることすら許されない國があるならば、これくらゐ不合理なことはない。更に藝術の創造力が一國の一小部分にのみ動いてゐて、その國の生活者の大部分が自己の表現慾に對して全く痲痺してゐるならば、その國の文化は病的であり、半死狀態である。かやうな國に於いて若し藝術的作品がなされたとしても、それは摸造か移植かに終る。なぜならばその國自身の生きた生命の血は動き流れてゐないが故に、

吉江孤雁
佛文學者。早稻田大學教授。名は喬松。長野縣鹽尻の人。明治十三年九月生まる。

一小部分に咲き出た藝術の花は、不斷の精氣を大地の中より攝取し、大地そのものの元氣の不斷の發露の口となることが出來得ないからである。（吉江孤雁――フランス文藝印象記）

その後、百濟河成、飛驒の工が許にいひやるやう、「我が家におはしませ。見せ奉るべき物なむある。」と。飛驒の工定めて我をたばからむずるなめりと思ひて行かぬを、度度懇に呼べば、工、河成が家にゆき、この來たれる由をいひ入れたるに、「此方に入りたまへ」といはしむ。いふに隨ひて廊のある遣戸を引き開けたれば、内には大きなる人の黑み脹れくされたる臥せり。臭きこと鼻に入るやうなり。思ひかけぬにかかる物を見たれば、音を放ちて愕きてのきかへる。河成内に居てこの音を聞きて笑ふこと限なし。飛驒の工怖しと思ひて土に立てるに、河成その遣戸より顏をさし出でて、「やおのれかくありけるはただ來たれ」といひければ、おづおづ寄りて見れば、障子のあるに、はやうその死人の形を描きたるなりけり。堂に謀られたるが妬きによりてかくしたるなり。二人の者の態かくなむありける。（今昔物語）

ゼネヴァ　瑞西の最西ゼネヴァ州の都。ゼネヴァ湖畔にあり。Geneve

湖水　ゼネヴァ湖。新月形をなし、風色絶佳なり。

一四　海南小記の序

ゼネヴァの冬は寂しかつた。岡の竝木の散り盡す頃から、霧とも雲の屑とも分らぬものが、明けても暮れても空を蔽ひ、時としては園の梢を隱した。月夜などは忘れてしまふやうであつた。木枯も時雨もこの國には無かつたが、四五日に一度づつしめつた風が湖水を越えて西北から吹いて來てその度ごとに冬を深くした。寒さの頂上といふ頃には、或朝は木花が咲く。その時ばかりは霧がすこしうすれて山の眞白な雪が見え、日影がさして鳥の姿などが目に映じた。

遠い東南の虹あざやかなる海の島と、島で行き遇うた色色の人と、その折の僅な旅の日記とを、それからそれへと思ひ出すのは、かういふ日の午後の散歩の時であつた。自分以外に、ただ一人だけ沖

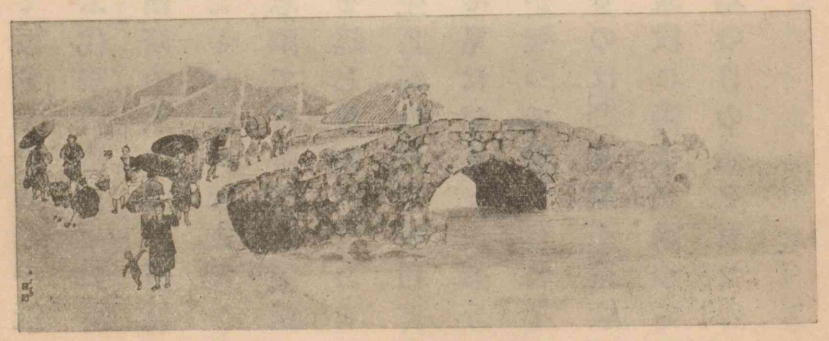
チェンバレン　言語學者。英國ハンプシャーの人。東京帝國大學教師たること數年。解職後文科大學名譽教授に列せらる。和歌論その他著書多し。西暦一八五〇年生まる。Chamberlain

ルソー　佛國の哲學者、文學者。民約論、エミール等の著あり。（西暦一七一二年―一七七八年）Rousseau

ラフカディオ、ヘルン　英國人。我が國に歸化して小泉八雲と稱す。東京帝國大學に教授す。明治三十 Lafcadio Hearn

繩といふ島を知つて居る人が、同じこの町のしかも同じ丘に、わづか五六町を隔てて住んで居るのだが、それを知りながらも訪ねて話をすることの出來ぬのが、特に堪へがたい旅人の無聊であつた。

この人は日本では誰知らぬ者も無いチェンバレン教授である。どうした心持からかゼネヴァに來て、人に忘れられつつ靜に老いんとして居る。家はルソー舊居の近くに在つて、番地までも自分は知つて居た。先生はラフカディオ・ヘルンよりもたしか三つ四つ若かつたから、まだ七十には大分間があるはずだ。ひどく眼が惡くて、その眼は



琉球風俗（松村梅叟筆）

七年九月歿す。（二五一〇年―二五六四年）

腦から來てゐるといふことであつた。強ひて面會を求める手紙を出した者もあつたが、病氣に障るからといふ代筆の斷が來たさうだ。秋の初のまだ暖かい頃までは、それでも樹蔭や水の滸を看護人に伴はれて逍遙して居られるのを見かけたといふ人も幾人かあつた。そんなら自分もよそながら一度はと思つて、折折靜な午後などに往つて見たこともあつたが、終に目的を達しなかつた。

日本ずきの或青年工學士は、古本屋で先生舊藏の若干の和書を買ひ入れた。これを聞いて自分たちも往つて見たが、もう大部分は賣れてしまつて、一册の日本國語文典だけが殘つて居た。有名な先生の自著であつて、しかも澤山の書入があるのは、疑も無く再版の準備であつた。同行の一人が心を動かして、値段に構はず購つて還つたから、この本ばかりは久し振に再び日本の日の光を見たのである。

ベシル、ホール　Becil Hall

日本とこの學者との因緣は竝竝でなかつた。日本に生まれて一生涯勉强したものにも、先生だけの蒐集と述作とを遺し得た者は多くなかつた。我我が今頃少しづつ必要を唱へて居る土俗誌の研究に、先生は遠國から來て三十年前に手を著けた。アイヌ民族の言語に就いても大いなる感謝は先生に屬する。殊に琉球に至つては、その母方の祖父船長ベシル、ホールの曾て訪ひ寄つて、なつかしい見聞錄を世に留めた島である。その孫に取つては家の學であり、由緒ある研究であつた。定めて人知れぬ愛著を以て學問の成長を希うて居たことと思ふのに、あの後先生の迹を踏んでこれを敷衍しようとした者が無いばかりか、不本意なる若干の小誤謬までが今にその儘にして棄ててあつて、本だけが所謂珍本となつて、讀みもせぬ人の本箱の底に追追と隱れて行く。先生の今の境遇を知る者には、これは言ひやうも無い寂しさであらう。

運命はかくの如く時としては人間の書齋までを支配する。古代の海洋民族の大移動を記念すべき有形、無形の不思議な遺物、彼等に拮抗して今なほ聊も衰へざる自然力、兩者の妥協を意味する文明の變化、就中血と言語との止む能はざる混淆が著しい影響を與へた部曲組織、宗教觀念、乃至は藝術樣式の島島の特色が、從來曾て見ない强烈なる興味を諸國の學界に喚び起して、次第に大規模の討査と比較研究とを開始する樣になつたのは、恰もこの疲れたる老學者が、その生涯の學業を切り上げた際であつた。これから大いに興らうとする新機運に向つては、先生は只一箇有益なる資料たるにとどまり、その計畫と希望とにはもう參加することが出來ないのである。況やこの北太平洋の一角に於いて、漸く今始まつたばかりの若若しい運動、卽ち島に生まれた者みづからが、島と島との生活の連鎖を昔に溯つて考へて見ようとする學問の如きは、假令

伊波普猷　沖繩の人。文學士。

それが先生の深く愛した日本であり、且先生の感化が暗暗裏に働いて居たことは確であつても、その悅を我我と分つことがもはや出來ないまでに弱つてしまはれた。

以前先生が名を聞きながら手を著ける機を得なかつた「おもろ御草紙」は、伊波普猷君などの辛苦に由つて今現代に蘇らうとして居る。これを沖繩一島の寶と羨むにとどまらず、かくの如き信仰歸依、かくの如き情緒を島に家する者の祖先の心裏に漲り溢れしむるに至つた最初の力が、ひとり血を共にする大八洲の國國のみならず、同じ大海の潮にはぐくまれて、北と南とに吹き分けられた遠い沖の小島の荒夷の胸にも、なほ一樣に感ぜられて居たのではないか。これを推究してもらひたいのが引き續いての我我の願であるが、久しい孤立に馴らされて、小さな陸地を國と名づけ、渚から外をよそと考へた人人の離れ離れの生涯の勞作が、果していつの世

ディレッタンティズム　Dilettantism　物すき。

になつたら融け合うて一箇の完成と爲るであらうか。かういふ外國の學者の老境を眺めるにつけても、散漫なる今までのディレッタンティズムの罪深きを感ぜざるを得なかつたのである。

海南小記の如きは至つて小さな詠歎の記錄に過ぎない。もしその中に少しの學問があるとすれば、それは幸にして世を同じうする島島の篤學者の暗示と感化とに出でたものばかりである。南洋研究の新しい機運が、一箇旅人の筆を役して表現したものに外ならぬ。唯自分は旅人であつた故に、常に一箇の島の立場からはこの群島の生活を觀なかつた。僅の世紀の間に作り上げた歷史的差別を標準とすること無く、南日本の大小遠近の島島に普遍して居る生活の理法を尋ねて見ようとした。さうして又將來の優れた學者たちが、必ずこの心持を以て人間の無用なる鬪諍を悔い歎き、必ずこの道を歩んで次第に人種平等の光明世界に入らうとするだらうと信じて居る。然らば事業は微小ではあつても、やがて咲き匂ふべきものの蕾である、歌ひ舞ふべきものの卵である。乃ち新しい民族學の南無菩提の爲に、謹んでこの書を以て、日本の久しい友ベシル、ホール、チェンバレン先生の生御魂に供養し奉る。

（柳田國男――海南小記）

柳田國男
法學士。前貴族院書記官長。

私の知れる日本人に三種類ある。その第一種に屬する者を私は愛する。第二種に屬する者は、私をして笑を催さしめる。この兩者に對しては私は極めて屢ば同情の念を起さざるを得ない。第三種に屬する者をば私は蔑視する。これは賤しむべき成功主義者や、背信者や、憐むべき無情無主義なる假面者や、所謂文士や、僞聖人や、又空虛なる饒舌家をいふのである。此等の徒輩はその穢い著摺れのした小外套を風のまにまに向けかへる。卽ち日和見をする。さうして、今日は佛人を氣取るかと思へば、明日はもう英人米人、もしくは更に露人を氣取つてゐる。然るにこの種の人人は私の所謂日本人には屬しないのであるが、又私は私の知れる日本人も亦、嫌厭の情を以て彼等から面を背けるだらうと望んでゐる。（ケーベル博士小品集）

鬼界が島
硫黄島のこと。鹿兒島灣口の南西三十海里にあり。

二人
少將藤原成經と平判官入道康頼と。

僧都
俊寛なり。法印寛雅の子。(一八〇三年―一八三九年)

鳥羽
京都府紀伊郡。

六波羅
今の京都市下京區六波羅密寺及び方廣寺の邊。平氏の邸ここにありき。

一五　有王島くだり

さる程に、鬼界が島の流人ども、二人は召し還されて都へ上りぬ。今一人殘されて、うかりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。僧都の、稚くより不便にして召し使はれける童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人ども今日既に都に入ると聞えしかば、有王鳥羽まで行き向ひて見けれども、わが主は見え給はず。「如何に」と問へば、「それは猶罪深しとて一人島に殘されぬ」と聞きて、心憂しなどもおろかなり。常は六波羅邊に彳みて聞きたりけれども、いつ赦免あるべしとも聞き出ださざりければ、僧都の御女の忍びてはしける處に參りて、「この瀬にも洩れさせ給ひて御のぼりも候はず。今は如何にもしてかの島へ渡りて、御行方をも尋ね參らせばやと存じ候ふ。御文賜はりて參り候はむ」と申しければ、姫御前斜なら

薩摩潟
薩摩南方の海洋をいふ。

法勝寺
白河法皇の創建。京都府愛宕郡東三條森の北、岡崎に舊址あり。

ずに悅び、やがて書きてぞ賜びてける。暇を乞ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず、唐船の纜は四月、五月に解くなれば、夏衣たつを遲くや思ひけむ、彌生の末に都を立ちて、多くの波路を凌ぎつつ薩摩潟へぞ下りける。薩摩よりかの島へ渡る船津にて、有王を人あやしめ、著たる物を剝ぎ取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ人に見せじと髻の中には隱しける。

さて商人船に乘りて件の島に渡りて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。おのづから人はあれども言ふ詞をも聞き知らず。有王島の者に行き向ひて「物申さむ」といへば、「何事」と答ふ。「これに都より流されさせ給ひたる法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行末や知りたる」と問ふに、法勝寺とも執行とも知りたらばこそ返事はせめ、ただ頭を振りて「知らず」といふ。その中に或者が心得て、「いさとよ。さやうの人は三

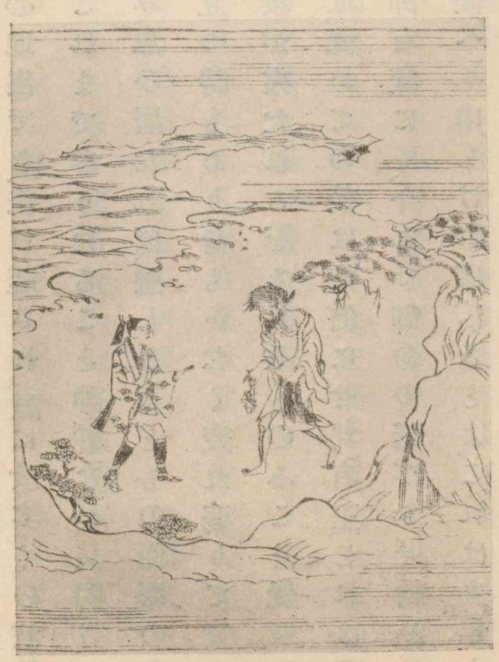
人これにありしが、二人は召し還されて都へ上りぬ。今一人殘されて、あそこよ此處よと迷ひありきしが、その後は行方をも知らず」とぞいひける。

山の方の覺束なさに、遙に分け入り、峯に攀ぢ谷に下れども、白雲迹をうづめて、往來の道も定かならず。晴嵐夢を破りてはその面影も見えざりけり。山にては竟に尋ねも遇はず、海の邊につきて尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく濱千鳥の外は迹とふものもなかりけり。或朝、磯の方より蜻蛉などの如くに痩せ衰へたる者よろぼひ出で來たる。もとは法師にてありけりと覺えて、髪は空樣に生ひ上り、萬の藻屑取りつけて荆棘を戴きたるが如し。繼目顯はれて皮ゆたひ、身に著たるものは絹布のわきも見えず。片手には荒海布を持ち、片手には魚を持ち、歩むやうにはしけれども、はかもゆかず、よろよろとしてぞ出で來たる。都にて多くの乞丐人は見し

白雲迹を云云　和漢朗詠集、紀齊名、「山遠雲埋行客迹、松寒風破旅人夢」。

沙頭に云云　和漢朗詠集、大江朝綱、「沙頭刻印鷗遊處、水底摸書雁度時」。

かども、かかる者はいまだ見ず。知らずわれ餓鬼道などへ迷ひ來たるかとぞ覺えたる。はや彼もこれも次第に歩み近づく。もしかやうの者にてもわが主の御行方や知りたると、「物申さむ」といへば、「何事」と答ふ。「これに都より流され給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やましまし」と問ふに、童こそ見忘れたれども、僧都はいかでか忘れ給ふべきなれば、「これこそそれよ」と宣ひもあへず、手に持てる物を投げ棄てて、砂の上にぞ倒れ伏し給ふ。さてこそわが主の御行方とは知りてけれ。



平家古板本挿畫

僧都やがて消え入り給ふを、有王膝の上にかき載せ奉り、「多くの波路を凌ぎつつ、はるばるとこれまで尋ね參りたるかひも無く、如何にやがて憂きめを見せむとはせさせ給ひ候ぞ」と、潸然とかき口説きければ、僧都少し人心地出でき、扶け起され、「誠に汝多くの波路を凌ぎつつ、はるばるとこれまで參りたるこそ神妙なれ。只明けても暮れても都の事をのみ思ひ居たれば、戀しき者どもの面影の夢に入る折もあり、又幻に立つ時もあり、身もいたく疲れ弱りて後は、夢も現も思ひわかず。今汝が來たれるをも只夢とのみこそ覺ゆれ。もしこの事の夢なりせば、覺めての後は如何にせむ。」有王「これは現にて候なり。さてもこの御有樣にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ不思議には覺え候へ」と申しければ、「いさとよ。これは去年少將や判官入道が迎の時、その瀨に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の『今一度都の音づれをも待てかし』など慰め置きし一言を、愚

にもしやと頼みつつ永らへむとはせしかどもこの島は人の食物も絶えて無き處なれば、身に力のありし程は、山に登りて硫黄といふ物を採り、九國より通ふ商人に會ひ、食物に換へなどせしかども、日に添ひて弱り行けば、今はさやうの業もせず。かやうに日の長閑なる時は磯に行きて、網人、釣人に手をすり、膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾ひ、荒海布を採り、磯の苔に露の命をかけてこそ、憂きながら今日までは永らへたれ。さらでは憂き世を渡るよすがをば如何にかすべき。これにては何事も語らひ難し。いざわが家へ」と宣へば、有王あの御有樣にても家を持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引き懸け參らせ、教に隨ひて行くほどに、松の一村ある中に、寄竹を柱とし、蘆を結びて桁梁に渡し、上にも下にも松の葉をひしと取り懸けたれど、雨風溜まるべくも見えず。有王、あなあさましし、もとは法勝寺の寺務職にて、八十餘箇所の庄務を司り給ひしか

西八條　平清盛の第。京都八條の北、坊城の西北にあり。
官人　檢非違使廳の官吏。
鞍馬　京都府愛宕郡。京都の北三里にあり。

ば、棟門、平門の内に四五百人の所從、眷屬に圍繞せられておはせし人の、まのあたりかかる憂きめに遇はせ給ふことの不思議さよとぞ思ひける。

僧都こは現にてありけりと思ひ定めて、「去年少將や判官入道迎の時も、これらが文といふこともなし。今又汝が便にもかくとはいはざりけりな」と宣へば、有王涙に咽びうつ伏して、しばしは御返事にも及ばず。稍ありて起き上り、涙を抑へて申しけるは、「君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參りて資財雜具を追捕し、御内の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆うしなひ果て候ひき。北の方は稚き人を隱しかねさせ給ひて、鞍馬の奥に忍びて御渡り候ひしにも、この童ばかりこそ時時參りて御宮仕仕り候なれ。いづれも御歎のおろかなる方は候はねども、中にも稚き人はあまりに戀ひ參らせ給ひて、參り候度毎に、『如何に有王よ。われを鬼界が島とかやへ

具して參れ』と宣ひてむつがらせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に痘にて失せさせおはしまし候ひぬ。北の方はその御歎と申し、又これの御事と申し、一方ならぬ御物思に思し召し沈ませ給ひて打ち伏させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍びておはしけれ。それより御文賜はりて參りて候」とて取り出だして奉る。

僧都これを開きて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、「などや三人流されておはします人の、二人は召し還されて候に、一人殘されて今まで御のぼりも候はぬぞ。あはれ尊きも賤しきも、女の身ほどいひがひなきことは候はず。男の身にても候はば、渡らせ給ふ島へも、などか尋ねまゐらで候べき。この童を御伴にて急ぎ上らせ給へ」とぞ書かれたる。「これ見よ、有王よ。この子が文の書きやうのはかなさよ。おのれを伴にて急ぎ上れと書きたることの恨

めしさよ。俊寛が心に任せたる憂き身ならば、いかでかこの島にて三年の春秋をば送るべき。今年は十二になるとぞ覺ゆるが、これ程にはかなくては、いかで人にも見え、宮仕をもして身をも助くべき」とて泣かれけるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られけれ。「この島へ流されて後は、暦もなければ月日の立つをも知らず、只おのづから花の散り、葉の落つるを見ては三年の春秋を辨へ、蟬の聲麥秋を送れば夏と思ひ、雪の積るを冬と知り、白月、黑月の變り行くを見ては三十日を辨ふ。指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き者も、はや先立ちけるよ。西八條へ出でし時、この子が行かむと慕ひしを、『やがて還らむずるぞ』と慰め置きしが只今のやうに覺ゆるぞや。それを限とだにも思はましかば、今しばらくもなどか見ざらむ。親となり、子となり、夫婦の縁を結ぶも、皆この世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事ばかりこそ心苦しけれども、それは生身なれば歎きながらも過さむずらむ。さのみ永らへて汝に憂目を見せむも、わが身ながらつれなかるべし」とて、自ら食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡りて二十三日と申すに、僧都庵の中にて遂にをはり給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。（平家物語）

人の親云云　後撰集、藤原兼輔「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな」。

蟬の聲云云　和漢朗詠集、李嘉祐「五月蟬聲送麥秋」。

康頼、成經「頃は長月」俊寛「時は重陽。」康頼、成經「處は山路。」俊寛「谷水の。」俊寛康頼、成經「彭祖が七百歳を經しも、心を汲み得し深谷の水。」地謠「飲むからに、げにも藥と菊水の、げにも藥と菊水の、心の底も白衣の、濡れて干す、山路の菊の露のまに、我も千年を經る心地する、配所はさてもいつまでぞ。春過ぎ夏たけて、又秋暮れ冬の來たるをも、草木の色ぞ知らするや。あら戀しの昔や。思出は何につけても、あはれ都にありし時は、法勝寺法成寺唯喜見城の春の花、今はいつしか引きかへて、五衰滅色の秋なれや。落つる木の葉の盃、飲む酒は谷水の、流るるもまた涙川、水上はわれなるものを、物思ふ時しもは、今こそ限なりけれ。（謠曲俊寛）

一六　成功の意義と安心立命

世に事業をいひ成功を語るもの何ぞ多くして、その眞意義を解するもの何ぞ少きや。畢竟事業とは何ぞや、成功とは何ぞや。

人目を炫耀する事業を成就し、物質的なる實利、實績を社會に寄與することをのみ、果して事業といひ、成功といふべきか。かくの如きはむしろ事業といひ、成功といふ意義を淺薄、狹隘、俗陋ならしむるものにあらずや。湛然深く潛して自家人格の根柢に培ひ、その心田、品藻を涵養する、これ亦深き貴き意義にての事業にはあらざるか、成功にはあらざるか。

偉いなる事功の貴きと共に、偉いなる事功に向つて奮進、向上する活動そのものは、更に更に貴き事功ならずや。たとへ活動、向上が何等の較著なる效果を產せずとも、たとへ落落たる雄心、大志を抱

いて空しく蓬蒿の中に埋了するが如きありとも、誰かこれを目して全く失敗せりとはいふべき。これを失敗とするは、これ畢竟おのれが狹陋なる功利眼、實益眼を以てのみ成功の意義を解すればなり。事業といひ、成功といふ、さしも淺膚なるものならんや。余は眞理そのものを貴ぶと共に、眞理を無限に追求して已まざる研究心そのものを更に貴ぶ。眞理を贏ち得ること若し貴き事功ならば、眞理の追求に熱する心、亦これ貴き事功にあらずや。かくの如くに觀じて、事業といひ、成功といふ意義、始めて淺薄ならず

綱島梁川

或は又直接に利民、濟生、愛他、慈善の事に從ふをさして事業とし、そを成就する者を成功の人と呼ぶ。されどこれ亦ただ事功の一面の意義を掲げたるもののみ。自家の德器を成就する、これ亦事功に

非ずして何ぞ、偉いなる社會的事業にあらずして何ぞ。すでに自己を完成し得たり。德ある所その感化は孤ならず、吾が潛德の幽光おのづから能く一鄰人の心を感孚するを得んか。誰かこれを貴き事功にあらずとはいふべき。世の事業をいひ、成功をいふもの、その洞觀の眼を開いて、此の如き聲なく、臭なく、默默たる中に行はるる心靈的事業の偉大なるを看破せざるべからず。且や利他といひ、兼濟といひ、談豈容易ならんや。他を救はんとするものはまづ自ら救はざるべからず。深切なる箇人的教養の基礎を作らずして、遑遑として利他をいひ、博愛をいふ。果して能くその謂ふ所の事功の目的を達し得べきか。

世の所謂英雄、偉人のみが、果して成功の兒なるか。正直に自己の額に汗して、日常義務の高道を闊歩する幾多無名の英雄、これ亦成功の兒に非ずや。英雄、偉人及びその事業にのみ感謝することを知つて、寧ろその基礎たるべき幾多無名の英雄、無名の事功に感謝することを知らざるは、これ自家存立の意義をだに自覺せざるものなり。人道の爲に盡すもの、豈ただ英雄、偉人のみならんや。

吾人は世の所謂英雄、偉人たらずとも、尙その清き心情と尊き行爲とを以て、天地の實在と連なるを得べし。而してこの一箇の自覺の上に、不動の安心を悟することを得、たとへ我が事業を以て社會に連なるを得ずとも、我が心情、行爲を以て天地の大系統に連なるを得るにあらずや。

この至高の一境に立たんか、世の所謂偉いなるもの、未だ必しも偉いならず。嗚呼ここに我等が解脫の道は開かれたり。ここに現實以上の廣大なる光榮の天地あり。ここにこの世の子等が解し得ざる自由あり、平安あり、慰藉あり、光明あり。（綱島梁川――病間錄）

綱島梁川　名は榮一郎。哲學者。岡山縣の人。明治四十年十月歿す。（一八五三年―一九〇七年）

赫奕姫　竹取物語中の女主人公。

一七　月の都

三年ばかりありて、春の初より、赫奕姫月の面白う出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは忌むこと」と制しけれども、もすれば人まには月を見て、いみじく泣き給ふ。文月の望の月に出でゐて、せちに物思へるけしきなり。近く使はる人人、竹取の翁に告げていはく、「赫奕姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりてはただ事にも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よくよく見奉らせ給へ」といふを聞きて、赫奕姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ。うましき世に」といふ。赫奕姫、「月を見れば、世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき」といふ。赫奕姫のある所に至りてみれば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「あが佛、何事を思

ひ給ふぞ、思すらむこと何事ぞ」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細くおぼゆる」といへば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば物思すけしきはあるぞ」といへば、「いかでか月見ずてはあらむ」とて、なほ月出づれば出で居つつ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時時はうち歎き泣きなどす。これを、使ふ者ども、「なほ物思す事あるべし」とささやけど、親をはじめて何事とも知らず。

赫奕姫（吉村忠夫筆）

葉月望ばかりの月に出で居て、赫奕姫いといたく泣き給ふ。人目も今はつつみ給はず泣き給ふ。これを見て親ども、「何事ぞ」と問ひさ

わぐ。赫奕姫泣く泣くいふ「さきざきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まですぐし侍りつるなり。さのみやはとてうち出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず。月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなむ、この世界にはまうで來たりける。今は歸るべきになりにければ、この月の望に、彼のもとの國より、迎に人人まうで來むず。さらばまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり」といひて、いみじく泣く。翁「こはなでふ事をのたまふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさおはせしを、我がたけたち竝ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや」といひて「われこそ死なめ」とて、泣きののしることいと堪へがたげなり。（竹取物語）

隅田川　荒川の下流。東京市の東部を貫きて東京灣に入る。

石濱　東京市淺草寺の北、今の眞土山、今戸、橋場一帶の總名。

一八　擬古文三篇

一、石濱の雨

葉月二十日あまり、秋のけはひの懷かしくて、例の隅田川のほとり石濱の庵にゆきて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧たちわたる曉のさまも、處がら世に似ぬものから、此處は雨のそぼふる日なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろほろと散るもあはれなり。水の面は動くともなくて鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひは

加藤千蔭

秩父の山
埼玉縣秩父郡の山山。

朝雲出馬鞍
旅人の朝行こまのひづめよりくも立のぼるあしがらの山　千蔭

しるかりけれ。みをの一筋はさしひく汐にもまじらで、とはに縹の色に流れいにて沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞清水の落ちくるならむ。打ち向ふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるは流石にほのかに見えて、そのひまひまより長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢はやうやうに薄墨もてかき消ちたらむ如く、いとしも遙けきは、只なびかぬ煙とのみぞ見ゆる。此處彼處より鳥の飛びゆきつつ、塒の鷺の翼おもげに起きいで

加藤千蔭筆

て、川の瀬の眞菰におり立てば、みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より、筏師の蓑笠きて、棹を筏の上に横たへ、手をこまぬきて思ふこともなげに居り。筏は水のまにまに流れゆくも靜

けし。渡守舟さし出せば、大笠傾けて渡りゆく人のやがて堤をあるくさま、繪にもよく似たり。すべて一日の中に、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風かよひ來て、岸の木立も長き堤も、あるは現はれあるは隱れて、限なき青海原に向ひたらむやうに覺ゆる折もありけり。かくてやや夕暮近くなりゆけば、群鳥のおのがじし塒求むるに、雁の一つら二つら渡りゆくなど、えもいはむ方なし。暮れはててもなほ逝く水の色のみ遠じろく殘りて、川添小田にいはへる水分の神の御燈の、海士の漁ともいふべく、かすかに見

濱石

え渡るもあはれなり。

秋ふけて小さめそぼふる隅田川
たが墨がきのすさびなるらむ。

（加藤千蔭――うけらが花）

加藤千蔭　江戸の歌人。眞淵の門人。通稱又左衛門、芳宜園と號す。枝直の子。又狂歌を好みて橘八衢と稱す。文化五年九月歿す。（一七三九年―一八四六年）

二、雪中眺望

柴の籬　作者守部は當時武藏國幸手驛に住みき。

をりかこふ柴の籬も山となりて鄰をへだて、竹の下道あと絶えて訪ふ人もなし。「あなさぶしや」といふほどに、「世にうもるるわび住の心やりには酒こそよけれ」と妹なねが榾さしくべ、琵のしり焚きくろめて勸むるに、軒はくもれど心はすこし晴れぬ。醉ふとはなしにうかれ出でて、駒にはひ乘るに、かき掃はぬ蓬が庭も玉敷きわたし、枯れたる木どもも花咲きぬれば、野邊のあたりやいかならむと、鞭打つ駒のゆきのまにまに、はしり出の堤にのぼりて見さくるに、天地のそくへのきはみ眞白にて、ただ刀根の川浪一すぢ黑くぞ流

れたる。

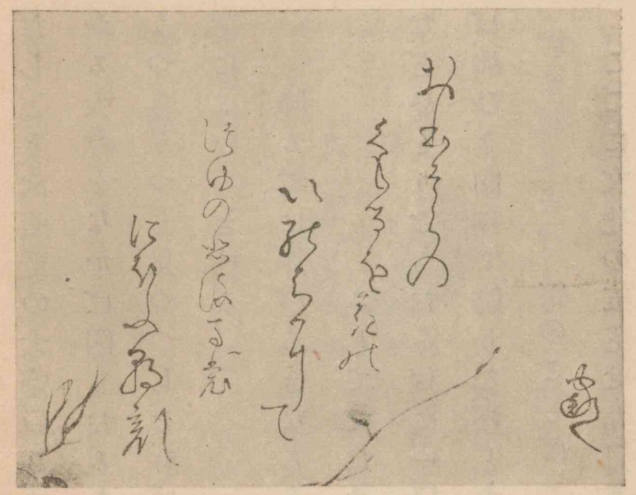
野も山も雪にくまなく近よりて
刀根の流のかぎりをぞ見る。

新田　群馬縣新田郡の山山。

守部　おほそらのくもるを花のいのちにてつゆのひるまもにほふ朝顏。

なにがしの嶽　淺間山をさす。

心高くも　新古今集、慈圓、「世の中を心高くもいとふかな富士の煙を身のおもひにて」。名だたる高嶺　富士山をさす。



橘守部筆

水上の新田、秩父、五百重山千重たたなづく群山を、何の山、くれの山と數へもてゆくに、遙けき峯より、け近く煙のたち上るもめづらしや。ひとり思ひあがりて、なずらふべき山のなきにぞなにがしの嶽とは知らるる。「心だかくも」とこそはいはまほしけれ。名だたる高嶺は時じくものから、繼ぎて降りしく大雪に、この出で立てる見わ

たしより、武藏野の大野のきはみ遠じろく麓につづきて、天にはばかる大傘をなかば開きたるさまにさし出でたるが、なほ珍しくて、うつらうつら見つつしをれば、駒の口はおさへとどめながら、心は空になむ行きける。

降る雪に片びらきなる大がさを
さしてたたせる富士のしらやま。

などひとりごちたる程に、一杯の酒も醒めてすずろ寒くなりぬれば、駒ひき向けて歸りなむとす。（橘守部――守部家集）

橘守部　國學者。伊勢の人。江戸に住す。通稱北畠源助。嘉永二年五月歿す。（一二四四一年―一二五〇九年）

三、祭のことば

ここに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うなね突きて申さく。あはれ悲しきかも。君は我に十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさに

縣居　賀茂眞淵の號。

さかりの齡におはして、我はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物まなびにゆきかひたる時、朝に參るとては君の御はかしの後に從ひ、夕べに退るとては君の御袖のもとにすがりて、あひうるはしみまつれること、親子、はらからにも何か異ならむ。書讀むとては、君を師ともたふとみ、歌作るとては、我をおとととひのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君はつかへの道に暇なくおはし、我は世のさがにかかづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君つかへを退き給ひて後は、我も同じ衢にうつり住めば、花を尋ぬとてはわれ道しるべをなし、月を思ふとては君が舟にあひ乘り、憂きことも共に愁へ、うれしき節も共に喜びて、世にありふる業の、まめ事も、あだ事も、かたみに隔なく心をかはせること今にはたとせ、そのはじめを繰りかへし數ふれば、あひ友たること既に五

村田春海

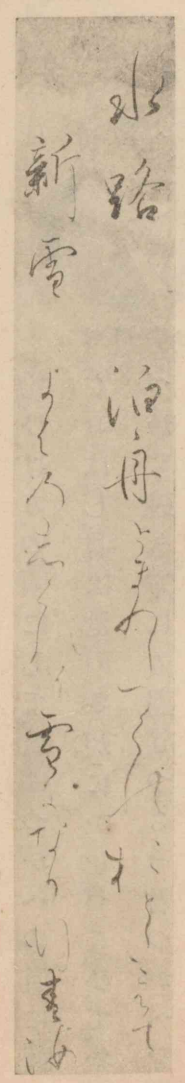
賀茂の翁　賀茂眞淵。

株を守り　韓非子に、「宋人有二耕者一、田中有レ株、兎走觸レ之、折レ頸而死、因釋レ耕守レ株、不二復得一レ兎、爲二宋國一笑一也」。

水路新雪　泊舟とまのしづくのおとたえてよはのしぐれぞ雪になり行　春海

舟にきだつくる　呂氏春秋に、「楚人、劒自二舟中一墜レ水、遽契二其舟一曰、是我劒所二從墜一也、舟已行、而劒不レ行、不二亦惑一乎」。

十とせにぞ餘りける。さるを今おくれ奉りて、いつの世にかあひ見む、いづれの時にか言とはむ。常なきは人の身のならひぞと知れども、これをいかでか歎かざらむ、かかるを誰かはよく堪へむ。あはれ悲しきかも。文の林世世に衰へ、言の葉の道日日に下り行けるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古にかへり、青雲の高き心しらひを求め、倭文機のあやなるみやび言を尊みいへれど、株を守り、舟にきだつくるともがら、彼になづみ此處にひかれて、なほ怪しみ咎むるたぐひは多く、魂あひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心をおこして、遍くさとし廣く誘ひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙になびき來て、古へぶりの歌世にさかりになりにけるは、まことに君の力によりてなり。そのみづから詠み出で給へる歌を見るに、古き調、新しき姿とりどりに備らざるなし。その古へをうつせるは藤原、寧樂の御世におよび、後の巧に習へるは堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは口に盡さざることなく、目に觸るるものは詞にのぼせざることなむあらざりける。これを見て、高きも卑しきも愛で尊ばざる人なし。また事ごのみの人は、その名を君に知られては、身のおもてをおこしと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にも換へじといひてぞ深く喜びける。さるを、いま金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、大方の世人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かかるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを泉の下にもさやかに聞し召し、天翔りても遙に見そなはせとなむ申す。（村田春海―琴後集）



村田春海筆

村田春海　江戸の國學者。春道の子。通稱平四郎、織錦齋又琴後翁と號す。眞淵の門人。文化八年二月歿す。（二四〇六年―二四七一年）

荒木田守武
伊勢山田の神官。天文十八年八月歿す。（一二一三三年―一二二〇九年）

山崎宗鑑
名は範重、通稱彌三郎。近江の人。天文二十二年歿す。（一二一二五年―一二二一三年）

猿の尻木からしらぬもみぢ哉　宗鑑

松永貞徳
久秀の孫。俳諧の法式を明にし、花の本の號を賜はる。承應二年十一月歿す。（一二三一年―一二三一三年）

安原貞室
名は正章、通稱鑑屋彦左衛門。京都の人。延寶元年二月歿す。（一二一七〇年―一二三三年）

北村季吟
國學者。通稱久助、拾穗軒又湖月亭と號す。近江の人。寶永二年六月歿す。（一二八四年―一二三六五年）

深山照射
さを鹿のふかくかくれし奥山もうき世はなれぬともしする也　季吟

池西言水
南部の人。享保四年歿す。（一二三〇八年―一二三七九年）

西山宗因
名は豐一、通稱二郎。肥後の人。檀林派の祖。天和二年三月歿す。（一二一六五年―一二三四二年）

一九　元朝

○　荒木田守武

元朝や神代のこともおもはるる。

○　山崎宗鑑

手をついて歌申しあぐる蛙かな。

山崎宗鑑筆

○　松永貞徳

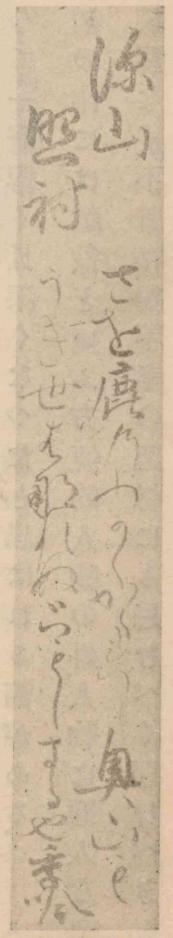
雪月花一度に見するうつ木かな。

○　安原貞室

これはこれはとばかり花のよし野山。

○　北村季吟

一僕とほくほくあるく花見かな。


北村季吟筆

○　池西言水

木がらしのはてはありけり海の音。

○　西山宗因

白つゆや無分別なるおきどころ。

やがて見よ棒くらはせむ蕎麥の花。

西山宗因筆

戸さしせぬ世とや水鶏の音　もなし　宗因

近松門左衛門　又巢林子と號す。本名は杉森信盛。淨瑠璃作者。享保九年十一月歿す。（一六三一年―一七三八年）

二〇　巢林子の藝術

近松門左衛門は愛の藝術家といはれてゐる。彼の名を不朽ならしむべき二十四曲の世話淨瑠璃の人物は、皆近松の博大な愛の胸に抱かれて、冷酷な當時の常識的批判、因襲の道義的非難から保護されてゐるのである。近松はかういふ意味に於いて、愛の藝術家である。愛の人である。

世話淨瑠璃を通じて見れば、近松の人格は歳と共に發展し、晩年に至つて一層博く且深くなつたと思はれる節がある。

前期の作には、敵役といふ方便的人物の外、人物に惡人なく、又事件に純惡なく、不所存、親不孝の題材にも、忌むべく惡むべき動機がないのを一般とする。場合に由つては、人物に道念の強いものがあり、情死などの動機にさへ道義的なものがあるのである。この點に

西鶴　井原氏。松壽軒又二萬堂と號す。元祿六年八月歿す。（一六三〇年―一七三五年）

於いて、何れの人物にも立派な所があり、愛すべき所がある。殊に彼等が義理の爲に、同情の爲に、直に死を決する所は、恰も武士が忠義の爲に死を鴻毛の輕きに比したやうなものである。健氣といへば健氣である。その死は立派といへば立派であるが、實際の人間としては餘に生を輕く見過ぎてゐて、人間味が少い。一本の絲にでも縋つて、一日でも現實を享樂しようとする西鶴が作中の人物の方が人間的である。私共は、近松が曲中の死んで行く人物に一とほりの理解と同情とを持ち得るが、この死について思ひ切りのよすぎる點に於いては、眞の理解と同情とを持ち得ない。

藤村作

後期の作には、かういふ人物ばかりと限らないで、臆病未練な人物もあり、非道の人物もある。それだけ我我には見知り越しの人間

である。此等の人物は、その行迹の上でいへば、愚かもの、未練者たることは明かであるけれども、賤しむべき、又惡むべき所はない。畢竟作者の博い愛が注がれてゐるからである。

かく前期、後期の作を比較して見ると、前期の作中の人生は、比較的に完全に近い。人物事件が作者のために德化され、淨化されて、そこに、智も德も、それを實行する意志も見えるのである。この人物、事件の德化、淨化といふことは、近松の慰みの基礎に立つた藝術觀から意識的になされたものでもあるが、彼の同情の愛が自然にかく德化し淨化して見させたことも、勿論否定されぬと思ふ。然しながら、尙深く考察すると、近松の性格は、これを西鶴などに比べると保守的である。隨つてその思想は因襲的である。西鶴が勃興の元祿町人の生活の基調を確實に把持して、猛烈な物質慾と、盲目的に奔放な享樂精神とを彼の藝術中の人生の根本に据ゑてゐるのに拘ら

ず、近松は舊道德や、固定した慣習を重んじて、所謂義理と人情との葛藤に惱まさるる人生に滿腔の同情を注いでゐる。これに由つて見れば、彼は前期に於いては性格の弱點に滿ちたままの人間、不義、不德の相を暴露した儘の事件には同情し得なかつたのではあるまいか。卽ち彼の愛の博さは、この種の人物、事件を容れ得ない程のものであつたのではあるまいか。それが年月を經るに隨ひ、近松自身の人格が發展して、彼の元より博かつた愛が一層博大となつて、醜惡なる相を有つたままに、その人物、事件にも深い愛情を感じ得るやうになつたのではあるまいか。

近松門左衛門

近松の作を讀んだ時の心持を顧みてみると、何ともいひやうのない懷かしさ暖かさを感ずる。事件は何れも悲慘であり、人物は何れも教養の足らない者であり、その者の生涯は缺陷の多いものであるのに、何故かく懷かしく暖かく感ずるのであらう。その解は色色あり得るが、私は事件、人物を包み得て餘りある作者自身の博大な愛そのものに引きつけられる感じが、主なものであらうと思ふ。この愛は、曲全體の上を何處となく蔽うてもゐるが、又隨所に印象の深い、人情に徹した名文句となつて滲み出てもゐる。かかる曲を讀んでかかる愛に接することは、その他の點は措いて、只それだけでも、我我に取つては愉快なことである、有效なことである。

巢林子の時代淨瑠璃は、悉く武家精神の通俗宣傳たるものである。元祿時代は主從の上下關係と、軍人たる職責を基礎として成立した武士精神と、個人の福利を營むを本務とした町人精神とが、階級的に獨立して、未だその相互の浸潤、感化を著しくしなかつた時代である。武士も武士らしい武士であれば、町人も町人らしい町人であつた時代である。その後、兩階級の間に兩精神の浸潤感化が次第に行はれて來たのである。武士の町人化は、武士本位の時代であつたから、武士の墮落として政治當局者や識者の憂となつたのであるが、町人の武士化はそれが階級制を壞すやうな事でないかぎり、多く問はれなかつたのみならず、實際町人の德操、品位を高めたものは、その感化に由つたのである。この武士精神を町人間に宣傳して町人の武士化を促した上には、近世の所謂通俗文藝の功が多い事はいふまでもあるまい。

巢林子はこの方面に於いても、けだしその尤なるものである。彼は新淨瑠璃の陣頭に立つた人で、彼によつて淨瑠璃文學は大成せられて、爾後の作者は一人として直接、間接にその感化を受けてゐ

ないものはない。極端にいへば、悉く摸倣追隨者である。かうして彼に依つて大成された新淨瑠璃時代物の內容は、殆ど彼以來固定した有樣であるが、その中心たるものは武士道精神に外ならぬ。時代の選み方は、王朝時代であらうと、武家時代であらうと、又場所が我が國であらうと、外國であらうと、說話の根幹となつてゐる精神は常に近世武士道精神である。この精神を表現するに、彼は彼の所謂慰みを目的とした民衆的な藝術の衣裳を以てした。彼のなした時代錯誤や階級混同は、彼の無智無學から起つたのではなくて、彼の藝術上に意識した目的から來たことである。彼はこれ位の事を知るだけの歷史の知識は持つて居たに相違ないが、無智な民衆の娛樂を目的とした爲に、これを犯すことを辭しなかつたのであらう。この事を敎化上から考へて見れば、むしろ彼の藝術の强みである。彼の藝術意識が、馬琴などの如き儒敎風の功利的敎訓主義でなかつた爲に、彼の藝術は馬琴物の如き淺膚露骨な敎訓物に墮せずに濟んだ。而して敎訓物に墮しなかつた所が敎化上一層有效であつたに相違ない。武士道精神を主內容として、通俗的で受け容れ易く、美しい麗しい色と甘い味とをつけられた娛樂的な藝術の形で創作され、作每に一代の人心を沸かしめたのであるから、その社會敎化上の效果の尠くなかつた事は想像するに難くないのである。唯政治家の事業の如く、又は學者の著述の如く、その效果を計る尺度のない爲に、或は世人に看過され易いが、若しここに是等と平等に計量し得べき方法があるならば、彼の直接、間接の社會敎化上の業績は中中偉大なものであらうと思ふ。

以上は敎化の立場から、巢林子の時代物に就いて一般的の考察をしたのであるが、不朽の名譽を與へられてゐる世話淨瑠璃には、自ら別箇な考察の立場を要すると思ふ。彼は、暗黑はこれを光明化

馬琴
小說家。江戸の人。本名滝澤解。寫永元年十一月歿す。（一七四一年—一八五〇年）

し、不倫不義はこれを道義化して敍述描寫したのである。それを美化して、美しい樂しい甘い清い色彩を賦して表はしてゐる。而して彼の音樂的、抒情的な、洗煉された豐麗な筆致は、鑑賞者をして恍惚として一種の夢幻界に彷徨せしむるのである。道德的には善かれ惡しかれ、彼の藝術が當時の人人の實際の生活を支配したものがあつたと推測し得られるのは、かかる性質を持つからである。實をいへば、巢林子の藝術は尙幼稚な所がある。殊に寫實の尺度からすれば、幾多の不自然、不合理の缺點を有して居る。それにも拘らず、善くも惡しくも、少からぬ感化を當時の社會に與へたに相違は無い。その價値の批判はその標準の取りやうによることで、ここでそれを論議する場合でもあるまいが、感化の偉大であつたと推定せらるる所に、彼の藝術の力の他に優つた一事は認められるのである。

（藤村作――上方文學と江戸文學）

（藤村作）文學博士。東京帝國大學敎授。福岡縣の人。明治八年生まる。

蝶の翅の云云　石曼卿の詩に「蝶遺ニ粉翼一輕難レ拾、鶴墜ニ霜毛一散未レ轉」。

木曾の御阪　長野縣西筑摩郡

馬籠峠の古名。

風越の峰　同縣伊那郡。今權現山といふ。

浮世の民におほふかな　千載集、慈圓「おほふかなふけなく浮世の民におほふかなわがたつ袖に墨染の袖」。

おほ井山　長野郡佐久郡。

離れ阪　長野縣佐久郡。

筑摩川　長野縣南佐久郡に發す。

二一　最明寺殿道行

行方定めぬ道なれば、行方定めぬ道なれば、來し方も何處ならましこれは一所不住の沙門にて候。我このほどは信濃の國に候ひしが、餘に雪深くなり候ほどに、まづこの度は鎌倉に上り坐禪にこもり、春になり修行に出でばやと思ひ候。蝶の翅の白粉を、草にこぼして梢には、鶴の霜毛をぬきかくる、雪は花より花多き、木曾の御阪の谷風は、吹けども袖に寒からで、名も嫉ましき風越の、峯の吹雪ぞ身には沁む。身は墨染の墨衣、さながら雪の一筆鴉、尾羽うち枯れし修行の旅、佛恩報謝の爲にもあらず、自證菩提の道にもあらず、浮世の民におほふかな。覆へど漏るる竹の笠、似合はぬ身にもひき締めて、しやんと召したる御有樣、あり難しともたのみあり。幾重越しても信濃路は、まだ谷峯のおほ井山、人里遠く離れ阪、筑摩の川に渡呼ぶ、

輕井澤
長野縣北佐久郡。

碓氷峠
群馬縣碓氷郡。

板鼻
群馬縣碓氷郡。

諏訪の湖
長野縣諏訪郡。

八王子
東京府南多摩郡。今市制を布く。

深谷宿
埼玉縣大里郡。

熊谷村
埼玉縣大里郡。

佐野の臺云云
夫木集「篠原や佐野のくくだち着にて旅ゆく人をしひとどめばや」。

佐野
群馬縣群馬郡。

聲も嵐にうづもれて、笠で招けば笠の端に、霰たばしる。氷柱からから輕井澤、碓氷峠にさしかかり、上れば下る谷川の、凍らぬほどは聲立てて春も近しと岩間水、木木の木の葉を吹きためて、今日山姫の衣配り、物裁よしと色色の、錦裁つなる板鼻の、宿を麓の阪本や、諏訪の湖なほ冴えて、鴨や鷗や、鴛鴦のつがひも雁がねも、下り居るほどはおしなべて、皆白鷺と深山颪がさらさらさら、さつと吹いてはぱつと群立ち、拂ふ翼におのがとりどり色品を、分けて見せたる雪の空、殘んの月は浮めども、兎はなづむ厚氷、驛路の馬ぞなみ走る、走る馬にも鞭鐙、武藏も近き秩父山、八王子山の山賤も、外山の爪木樵りつくし、雪を燻らす炭竈や、深谷の宿のふかぶかと、冬籠せし一枝も、春待ち顏に初花の、咲きかけんとや一二の影、熊谷村に盃の、佐野の臺さかなにて、强ひとどめんとよみ置きし、古歌を吟じて凌げども、雪の寒さのさのみやは、佐野の渡に著き給ふ。（中略）

常世
佐野源左衞門。雪は鷺毛に似て云云
白樂天の詩中の句。

候と聞もあへずつゝ立てはがみをなしエ、腹立や何條小僧めうちもらしたんな、顯朝冠者めをしたひ蛭が小島へはしりつらめよしゝゝいづくにかくるゝ共運つよき此禪門からめとらでおくべきか大敵義朝も白骨と成ても二たび足下に來る我威勢亡魂
最明寺殿
北條時賴。

世の中は、何か常世が留守住ひ、妻は手足も土大根、蕪ゑぐ菜も摘み持ちて、歸る山路の白妙に、降つたる雪かな。いかに世にある人の、さぞ面白う見給ふらん。それ「雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を著て立つて徘徊す」といへり。されば今降る雪も、もと見し雪に變らねども、我は鶴氅を著て立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖狹き、細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。最明寺殿これこそは以前の女が姉ならめと、「なうなう主のお方にて候か。御覽の如く旅僧の身のお宿の御無心申せしかど、主の御留守とありし故待ち設けたる御歸り、前後を忘ずる大雪、今宵ばかりの御惠賴み入る」

近松門左衞門筆

とぞ仰せける。「げにげに易き御事ながら、見苦しき賤が伏屋、何とてお宿と申すべき。」「いやいや旅といひ、三界の家を出でたる世捨人、草の莚も我がための玉の臺とあり難し。是非に一夜」と宣へども、「あれ御覽ぜ。われわれ夫婦姉妹さへ、住まひかねたる體なれば、泊め申さんやうもなし。これより十八町彼方に、山本の里と申して、よき泊の候へば、暮れぬ間に一足も急がせ給へ」といひ捨てて、庵の内へぞ入りにける。

山本の里　群馬縣群馬郡。

「あら曲もなや、よしなき人を待ちつるよ。浮世の人の情なきも、我が誤」と顧みて、歩み疲るるばかりなり。妹の玉章涙ぐみ、「いたはしや御出家樣。最前お宿とありしかども、姉樣の心如何と存じ、外に立たせ置きませし。かく零落れしも前世の因果、せめて出家に値遇せば、常世樣の武運も開け、後世の爲にも悪い事なされたやうにはあるまじ。泊めてさへ進ぜませば、別に馳走は入るまいと、わしや思ひます」といひければ、「おお優しや。ようぞ氣がついた。これほどの大雪に遠くはよもや」と表に出で、「なうなう旅人、お宿參らせうなう。餘の大雪に申すことも聞えぬよの。いたはしの有樣やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、一つ所に佇みて、袖なる雪をうち拂ひうち拂ひし給ふ景色、古歌の心に似たるぞや。『駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮』かやうに詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり。これは東路の佐野の渡の雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや。なう旅の僧、旅のお僧」と招かれて、「それは嬉しき心ざし。假の浮世に假の宿、假初ながら値遇の緣、一樹の蔭の宿も、この世ならぬ契なり。」「それは雨の木蔭、これは雪の軒ふりて、うき寢ながらの草枕、これへ」とこそは請じけれ。（近松門左衛門――最明寺殿百人上臈）

駒とめて云云　新古今集に出でたる藤原定家の歌。

三輪が崎　奈良縣磯城郡。

マーテルリンク　白耳義の文學者。西暦一八六二年生まる。Mreter Linck

武夫のの歌　源實朝の作。

二三　大地は震動する

淺い鍋は早く沸き立つ。深い思は言語に現はれない。深い喜や深い悲しみには言葉が無い。言葉に現はれるのは眞に深いものではない。沈默は深い印象を與へる。沈默には深い意味がある。マーテルリンクが「蜂は暗黑裏に働き、思想は沈默裏に働き、德は祕密裏に働く」といつたのは面白い語である。詩歌などに於いても、徒に嬉しい又は悲しいといふよりも、却つてこれを露骨にいひ現はさない處に無限の情趣が味はれる。例へば、壯烈である、豪宕であると感歎の語を發するよりも、「武夫の矢竝つくろふ小手のうへに霰たばしる那須の篠原」といつた方が遙に壯大である。それと同じく、悲しいといはぬ處に眞に深い悲しみがあり、嬉しいといはぬ處に眞に深い喜がある。我等がソクラテスや基督の運命に對して、無限の感慨を

懷くのはこの爲である。

我等が深い心の奥底には、常に動いて止まぬものがある。この活動が鈍り若しくは停る時に我等は語を發する。しかもこの活動の眞相をその儘に發露することは困難である。されば、獨創的な深奥な思想家の書を讀む時は、常に晦澁拮屈を感ずる。このやうな思想家は出來るかぎりおのれの思想を現はし、これを傳へようとするのであるが、無限の活動はこれを捕捉することが容易でない。それで種種樣樣にこれをいひ現はさうと苦心する。そして讀者はその言語を辿つてその思想を得ようとするのであるから、その眞實相に達することが困難なのである。既にいひ現はされれば動かなくなる。このいひ現はされた動かないものを、再び整頓し改めて排列すれば平易明瞭ならしめることが出來る。これが卽ち獨創的思索家の書よりも、その紹述者の書が比較的に解し易い所以である。こ

れは深遠な思想のことのみではなく、我等の日常生活に於いても亦さうである。表面に現はれた多くのことは、あり觸れたことで何の奇もないやうであるが、然しその奥底にはいひ現はし難い深い活動があるのである。

奥の奥にある最も深いものは普通の意識では無く、意識の奥底にあるものである。これが人格の核である、眞の我である。我等が深く思に沈む時は、眞の我が自らを見ようとするのである。我が我を見ようとする時には何の語もない。水中に魚鼈が跳れば水面に泡が浮ぶ。この泡が語である。そして跳るところが深いと泡は立たない。跳るところが水面に近ければ近い程ますます多く泡が立つ。語の多いのは活動が淺い處に行はれる證據である。そして跳躍の形狀によつて泡の形狀に種類があると同じく、活動の樣式によつて語がそれに應じて現はれる。語はその人を表はす。かくて、生きた沈

ルーテル　獨逸の人。宗教改革を唱へ、ルーテル派の新教を創む。（西暦一四八三年―一五四六年）

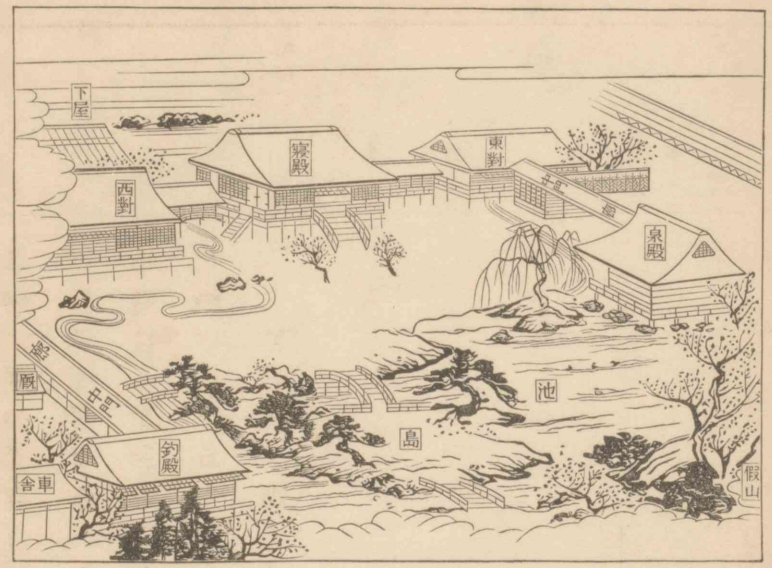
默は我等が深く自らの内に沈潛するのである。深く自らの内に沈んで自らを見る時に、我は具體的の全體に於いて現はれる。具體的のものは語では表はされない。具體的の全體は活きて居る不斷の活動である、自由である。この活動は自らに法則を賦與する。それが理論的に働けば純粹思惟であり、實踐的に働けば實踐理性である。前者には學の基礎が立てられ、後者には道德の基礎が立てられる。自己が自己に與へた法則に從つて働けば善であり、働かなければ惡である。惡は消極的であり、働かないことであり、意志しないことであり、非有である。從つて善惡は事の成果に在るのではなく、ルーテルのいつたやうに、「善事は善人を作らず、善人が善事を作る」のである。そして我が深く自ら省みて法則に乖いたと感ずる時に悔恨が起る。悔恨から罪の意識が起る。然し深く自らに沈潛しない時はこの意識は起らない。されば沈潛することの淺い人には罪の意識

は無い。從つて自ら辯護しようと試みる。ここに於いて語が多い。やがては不平を訴へる。自分ほど不幸なものは無いともいふ。眞實に切實に不幸を感ずるのは深く自ら省みた時である。卽ち深い奧底が動いて居るのである。動いて居る時は語は無い。痛切な深い悲哀も、大歡喜の法悅も、共に語はない。しかも大地は震動する

（得能文――淺人零語）

得能文　文學博士。東京高等師範學校教授。

中等國語讀本　新修二版　卷九　終



寢殿造の圖

書院造の圖

江戸時代　慶長八年ー慶應三年　二百六十五年間

第一期　啓蒙時代（七十八年間）

慶長八　誕生八（京都）

第二期　元禄時代（六十年間）

天和元ー元文五（大阪）

第三期　文運東漸時代（四十八年間）

寛保元ー天明八（大阪ー江戸）

第四期　文化文政時代（七十九年間）

寛政元ー慶應三（江戸）

西紀　一六〇三ー一八六七

近世文學一覽

紀元	天皇	武家	年號	作者	作品
二三五〇	後成		文祿	細川齋幽	
	後陽		慶長		
	後水尾		元和		
二三〇〇	明正		寛永	中江樹藤	
	後光明	家康			
	後西		正保	西原井鶴	
			慶安	芭尾松蕉	
			承應	沖契	
			明暦		
			萬治		
		家光	寛文	角其本櫂	
			延寶		
			天和	貝原益軒	
			貞享	左門衛門松近	
	霊元		元禄	白井新石	
				田竹雲出	
				徂生荻徠	
				北村季吟	
		綱吉	寶永	高惟原藤	三六三 家康征夷大將軍に任ぜらる 【儒學振興】 【古書出版】
			正德		
		家宣			
		家繼			
二四〇〇	中御門	吉宗	享保		
			元文		
			寛保		
	櫻門			眞淵	
				賀茂代千賀加	
				平賀源内	
				松永貞德	
				口谷燕村	
				宗山西因	
				横井也有	
				柄川井柳	
				小澤蘆庵	
				本居宣長	
				荒木田麗	
				加藤千蔭	
				上田秋成	
				村田春	
				石井獨	

作品
【檀林調俳句】 萬葉集代匠記 (一三三六) 【北村季吟の註書】 【假名草紙】 【西鶴物】 俳諧御傘 (一三〇六)
【蕉風俳句】 猿蓑(一三五一) 【近松時代物 世話物】 【浮世草紙】 國姓爺合戰 (一三七五) 大日本史 (一三七一—一三九六) 【賀茂眞淵の古學】

西紀 一六〇三——一八六七

二五三〇　二五〇〇　二四五〇　二四〇〇　二三五〇

明治：明孝　孝仁　格光　町櫻後　園桃　町櫻　門御中　山東　元靈

慶喜：茂定　定家　慶家　齊家　治家　重家　宗吉　家繼　家宣　吉綱　綱

慶應：元治　文久　萬延　政安　永嘉　弘化　保天　政文　化文　享和　政寛　明天　永安　和明　暦寶　寛延　延享　寛保　元文　保享　正德　永寶　祿元　貞享　天和　寶延

- 【檀林調俳句】
- 萬葉集代匠記（二三六）
- 【北村季吟の註書】
- 【假名草紙】
- 【西鶴物】
- 茂賀
- 眞淵
- 加賀千代
- 平賀源内
- 村燕口谷
- 有也井横
- 柳川井柄
- 庵蘆澤小
- 長宣居本
- 麗田木荒
- 蔭千藤加
- 成秋田上
- 田村
- 蜀
- 【賀茂眞淵の古學】
- 【蕉風俳句】
- 猿蓑（二三五一）
- 【近松時代物世話物】
- 【浮世草紙】
- 國姓爺合戰（二三七五）
- 大日本史（二三七一—二三七六）
- 春海
- 馬三亭式
- 菜一林小
- 北南屋鶴
- 人山
- 望雅川石
- 九一舍返十
- 陽山頼
- 樹景川香
- 胤篤田平
- 琴馬澤瀧
- 道言隈大
- 覽曙橘
- 紀知田八
- 月蓮垣田太
- 【八文字屋物】
- 柳樽（二四二五）
- 雨月物語（二四二八）
- 鵜衣
- 【酒落本】
- 【天明調俳句】
- 【狂歌狂文】
- 古事記傳（二四五八）
- 【黃表紙】
- 東海道中膝栗毛（二四六二）
- 【景樹の新歌調】
- 浮世風呂（二四六九）
- 【讀本】
- 里見八犬傳（二四七四—二五〇三）
- 【人情本】
- 日本外史
- 【草雙紙】
- 萬葉古義

昭和四年十月五日印刷
昭和四年十月八日發行
昭和五年十月一日訂正印刷
昭和五年十月四日訂正發行

編輯者　落合直文
編輯者　金子元臣

中等國語讀本（新修二版）

定價
自卷一至卷四　各金六拾四錢
卷五、六　各金六拾錢
自卷七至卷十　各金六拾壹錢

不許複製

發行所　東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番
株式會社　明治書院
電話神田(25)二一四七番(3)

印刷者　細谷祐三

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地
株式會社　明治書院
取締役社長　三樹退三
東京市神田區三崎町三丁目十二番地

5A.
T. Hamagaki